

變血書日載

卷三十二

大正三年五月上浣起筆

特別
14
1919
271



雙魚の教 大正三年五月廿日起筆

〇と記すの京都の代議士や信徒等と向て福
 京都大丸由以上の事教育方針の事扱ふは
 省長指の件オコトセ云々する所あるやあえが
 去り余ある一の時此の時局につき程々の説
 話と文小、仰とある演説に依り閉説式を為
 くる所特むるに例の如くえ兼より一四此此と毎
 朝五時起きに食後直ぐは本に接す二三日本脚部
 疼き方をききながらいふ言ふ録とすと済む、四
 氏達の云託に付伯里大士の之困らざる也級

九にステリ一連ある、どうも薩派の強み
をそと見く、どうも阿の志も世に由り
五解さといふ、佛の教あるし電流の
日十人抱く、脱と法とを報し、
之れを佛の報すん、佛のす、
と、佛のす、十人位、
曰く、加あるす、大、
ふ、ノ、キ、の、男、也、
る、感、を、
中、佛、の、
海、部、
と、

武中、七、
巨を、
リ、
本、
恥、
本、
と、
新、
後、
あ、
と、

○大隈の各の文改著一議のことありしを
早急の事とせざるを以て伯の文改著
ゆゑの事先以て目的を再三而して行
海運する所ありし一歩を以て其の
目的を漸く為す事とせざるを以て其の
あふらんをある事とせざるを以て其の
き全を提出する事とせざるを以て其の
事一或は許しえ推しざる事とせざるを以て其の
中にある物教の公なる事とせざるを以て其の
あるの事ある事とせざるを以て其の
ある事ある事とせざるを以て其の

生等謹んで書を総長大隈伯閣下より呈す 惟ふに閣下
曩きに大命を拜して内閣を組織せられたるは是固より
衆望の歸する所大勢の然らむる所と出づと虽とも實は
天下の人心平生閣下の意思氣に感動し閣下の持論に推服せ
るに依らざんばあらざるあり是を以て閣下一たび台閣の上
に立つや万衆齊しく閣下に向つて内政の刷新外交の振張と
同時に教育の根本的改革を期待せざるは莫し此時に際
し多年閣下の指導を蒙りて教育に従事せる生等は感
慨特に痛切なるものあるを覺ふるなり
閣下夙に學問の獨立を主張し立憲的教育の首義を唱道
せり是れ天下万人の能く知る所なり然るに我國従來の教
育は開發主義を捨て、注入主義を取り活動主義に反し

て形式主義に従ひ自由主義を排して劃一主義に偏し
學問の獨立を實現し立憲的教育の効果を收むるに適
せざることを世間既に定論あり生筆考ふるに教育の實

志

を挙ぐるは人に在りて制度よりならず苟も國家大に教育
の人格を尊重し其の忠實なる常識に信賴せば制度規
則は不完備なりと云ふとも教育の效果は自然に擧がらん
之に及びて國家若し教育者の人格常識に信賴せる能は
ざんば制度規則は如何に完備をとも雖も教育の效果は烏有
に歸せん 明治維新の際は無事草創にして保守的及動
氣勢未だ衰へず而して封建割據の遺風各地に横溢せり
此時に當りて專制劃一の學制を布きたるは政府の英断に
して又た時代の要求に出でたりと言ふも不可なからん然れ

十一八

ども爾來既に三十有餘年を経過し今日に至りて猶且つ旧
套を脱する能はざるは一は國民の無氣力に因ると雖ども抑
も政府の怠慢過失も亦た甚だ大なりと言ふ可し閣下の内
閣に在りて文政の局に當る者豈に此の責任に對して深く
思ひ遠く慮る所なくして可ならんや

今や全國の青年學生は嚴酷なる試験制度の苦痛に呻吟
せり是れ尙も教育の必要に出づる通敵大に非ざりて唯た故
育機關の設備不足に伴ふ所の害悪なり全國に於て小
學を卒業したる少年中進んで中學に入りんと欲する者あり
ば之を收容す可き機關不足し中學を卒業したる青年中進
んで高等専門の學校に入りんと欲する者あれば其機關
は一層不足し又た高等専門の學校を卒業したる學生中
更に進んで大學に入りんと欲する者あれば其機關は愈

々益々不足を告ぐるが故に政府は止むを得ず入學拒絶に
等しき競争試験を施行し及第者にして猶且つ一二年を
待たざれば入學の許可を得ざる者亦た少いとせず是
れ實に青年子女を視ること慈父母の如くたる國家の久く
放任し得べき事態に非ざるなり而して之を救ふの道亦
た甚だ難きに非ざるなり

苟くも政府活眼を開きて社會の真相を看破し従来官
公私^{學校}を差別せる一切の法規を廢止し全國各種の學校對

二

して其等級及び程度に従ひ一視同仁の政策を実施し私
立學校の設立を奨励して官公立學校の不足を補ふ試
験制度の愚蔽決して今日の如く甚だしくには致らざる可
し

要するに我國学制改革の急務は上大學より下小学に至
るまで官民協力し官立學校にも民間有志の寄附を奨
励し又た私立學校にも時々國庫の補助を與へて其の不
備を充實し各種學校の設立を迅速普及せしむるに在
り特に大學は全國の必要を謀りて單科綜合の別なく最
高程度の教育を施し得る者よは成るべく寛大の條件に従
ひ各地に其の設立を許可し大學の名稱及び特權を賦予
するに躊躇するを要せざるなり△

従来當局者が私立學校を目して危險思想の養成所と爲
し之を嫌忌したるは抑も國民教育の權利を官立學校のみに
壟斷して民設の學校を疎外し寧ろ其の撲滅を希望した

る僻見は外ならず。今や閣下内閣の首班に列し一般施政の大改革を断行せられんとす。生等雀躍欣喜の至り。堪へど聊か平素の希望を吐露して閣下の明察を仰ぐ事と為せり。閣下幸に一讀を賜らば亦以て生等微意の存する所を知るに足らん。

頓首

早稲田大学有志一同

大正三年五月 日

追白

一、我國の教育制度は普通教育に於て形式に偏せる傾向甚だ顕著なり。而して其の病源は一に師範教育の停滞不進に在りて存す。當局者深く爰に留意せん。

ことを要す。

二、全國一般の中等教育に於て試験制度の害毒最も猖獗を極む。當局者速かに之が救済の道を講ぜず

三

んば天下有為の青年を誤まらむること甚しからん。國家の深憂大患に非ずして何ぞ

三、我國の教育制度は下小学校より上大學に至る其の就学年限長きに過ぐるの限あり殊に大學豫備の教育に於て然りとす。今や我國政治、經濟、商工業等實際の社會に於て志操堅實、意氣活潑の青年を要する事緊切なり。然るに全國就學の子弟は常に學窓に潛み競争試験の耽毒に害せられ不知不識其志氣を銷磨せしめ他日大學を出るの日に及びては已に完成

の習氣を帯び勇敢の氣質を喪失すること甚しく活
社界に入りて其用に堪へざるもの少からず國家の爲
め最も痛歎すべしとなす此際深く此弊を洗除して
先づ高等中学教育に於て年限の短縮を断行せり
れ人事を望む

四、前内閣は博く衆議を容るゝの方針を取り教育調査

會を設けて調査に着手せし事項も亦た斷しとせず
現内閣に於ては一步を進め着々其の調査を遂行し
成案は速かに之を實施せりれんことを望む

五、適當の資格ある私立大学は之に官立大学と同等
の待遇を與ふる爲めに大学令を改正せりれんこと
を望む 軍科綜合の別は問ふ所に非ざる可きも全

教授中若干の専任教授あるを要せし

六、博く私立学校を奨励し勉めて之を官公立学校
と同等に取扱われんことを望む 其の希望條件の
二三を左に開陳す

- 一、高等文官外交官^判検事辯護士中等教員檢
定試験委員を私立学校より出たすこと
- 二、適當の資格ある私立大学は中等教育免許
資格の件に關し之を官立の文部省檢定学校
に準せしむること

四

三、私立学校より文部省海外留學生を出たすこと

○(十の口) 文政革新の方針 建設
高くしそ成しし余は向中終田中終田
中産を妻子馬治的仰に毛る仰に満し
徹者を提出す仰を即座一讀さん
まよふしと頷つゝ、文経を物さ
まことを書く仰をや、如意は向國に
通する教育物がよ改まること
ことをめがたむと終る、あるも
教育
浦重倉とて其と放棄あらし
を少しく民をさし、多かるる人
と治し、まも仰をの意と云
の提出の也、湖の意、味を一本
又おこら

得る
所あると仰に、其の
旨を

伯邸の存る伯に今も、
伯の編輯とて、
まゝく、の、
交り、山崎、
ううと、その、
の子と、
閣を、
寺内、
佐と、
中七、

日といふ能らうあおの伯の股肱と云ふ
 形ありあおの論する上は首あを
 三人前に論せらるる他の注あはらるる論を
 ともも分是をいふにゆと尾出武首
 の激論ハハと云ふ論多し事々
 政堂内閣のりといふ所次と云ふ伯の
 貴族の論に於て勅語をお交する能ら
 うつき形式を考ふや族をいふは是の
 況ありと云ふの論無然る片午を
 心いし勅語を元うと云ふに既と云ふ伯
 貴族の論に於て是つてはるおんを武
 士の論に於てはるをいふと係し伯の

漸く注をいふ所あり開説式の如きを
 と云ふまはしと云ふ若しと云ふさ
 衆をいふ一語と云ふのあり國史を
 と大書大書と云ふゆに既この流七出つ
 衆をいふと云ふゆと大書いとの関係
 衆をいふと云ふゆと大書いとの関係
 衆をいふと云ふゆと大書いとの関係
 衆をいふと云ふゆと大書いとの関係
 衆をいふと云ふゆと大書いとの関係

O十一の第地論ありんらるる後考の古今来家
 人七をいふと云ふと云ふの支那論と云ふ

諺る余其人を胡ふ里 肥前之戦は耳馬芳の
率由る軍隊は流ハ若人これ皆諺代のもよ而し
て之れを抵抗するまハ十萬の大軍にんも
ゆと缺く 苜望軍 騎赴つてゆき 交戦
の結果終る苜の敗る物も苜の軍潰れ
す 苜を自身を以つて免るる 軍たる此れを
お新考らるる 苜を以つて免るる 軍たる此れを
いと云くりと苜終 義容睡の率も 三番
の軍を擡げえ 敵の進撃を免る
れあり 大隈伯の也 苜望と云く
而して其の運命ももつてを 苜望と云く

いふ事いふことを ちまぬかやとを得たを 金向く
曰成也 伯の表氣 旺んまると若くも 田忌名
を伯の諺代 苜を以つて免るる 軍たる此れを
六のゆき 一報を敗るる 二進むるを 敗る
儀父の歎 無き能くしとて也と
の今ま 苜を以つて免るる 二階し 一室を 次
席中 苜を以つて免るる 苜を以つて免るる
てまを いろく 油分の元 苜を以つて免るる
るま 苜が 苜を以つて免るる 苜を以つて免るる
七張り 合とらるる 苜の 苜を以つて免るる
苜の 苜を以つて免るる 苜を以つて免るる
苜の 苜を以つて免るる 苜を以つて免るる
苜の 苜を以つて免るる 苜を以つて免るる

々々成金の形を以て代名を由らさるる
と骨董店を授けしを以て又高しぬ
香ひは高木の息ありて長く自分の名を
み集めしとを以て是れ所より見え
り立ちぬ間に入つては自分の味を投
し又高しぬとくつぬ物も前より見え
方々床の間の上のとを以て高しぬ
故に高しぬと四子高しぬと高しぬ
高しぬと高しぬ

仿しぬ

一 四足置花

洞定瓶之者 刻鏡

一 三足根来 脚唐おとす 銅の
小形山形 代名保氏
いんいん

一 坐帯 葉形

一 竹硯

一 古銅鍔口形小段名

一 方鏡寸古銅印

一 擬毛竹の拂子

一 吹人方子采山のちる一物

一 朱竹地十日像ある面打出銅牌

えるまゝと一高に置てもも魚ののろろうある
 跡も珍奇のしものをくくと弄つと癖な味
 うちうちとくくくくくくくくくくくくくく
 不浄なる汚穢なるものも人として不快を感
 せしあふうううううううううううううう
 うまう日本よあを一所の国と油和らえ
 九まい氣味がある、味もろくく油和らえ
 うりまといまをを遊擗するは一寸お目
 折れろ、大体坊主の口は比喩、式うよのう
 さうとを坊主臭くても雨もくまの、また
 氣味の比喩、えくくくく味比、高みはつ
 一向目をつくくくくくくくくくくくくくく

丸物に真いとまの遊を方ひるけん、まの
 先つ大体とこんて遊のめしてなるつもう比う
 勿論十数りの字の大十三十一に七音を其
 比ひてまのまのまのまのまのまのまのまの



女中約二尺七寸
 幅二尺弱
 土室の籠を
 入る
 こまえつ

職々言由年林細之鹿とあうつし
 の名人也

銅おとし 径八九寸

高廿七寸

ハト形

元禄以前製とのいふ



形小 破損あり 火鉢形
と云ふも 心付く 2寸
所也

○五月十三日 平山巻をゆめて古河を過る獲
りも多し 但此御ら 具を減して二極倍
り多しと云ふ一也

垣崎波御考

小名横柄を記 花多

海印考を記する 又 跡の鳥(念)の

杉前の人

谷文晁

紙葉を以つて彩をて赤
きる人を大々く書出さし餘
を記し ともいふ 帳層の太
天地 縮め

○五月十五日 天竺 横津田や唯 田代永
田代の文おとす 木文おをゆめて 教育
針 一つと云ふを海多し 亦多し 音見の大

体を伯に呈し其意見方に因じ一木も其も
往々の傍りいまだ文即と確とをまうく
意あるありしやうと今も其の結うる
行きとまうとを扱ひて大体論をまうく
え止り并今を約して退出す
○黒田太久馬方を治めて止る支那陝西
甘肅道にむすむすの年を陶器を
中へ乳と納りて味を感しとまうく一二と
殆ど一と

宋代古磁の七條

余況：宋宮の玉二三と花をみるも宋古磁
といふこと初めとまうく此條未だ何をも

てす佛像のみくくも佛像も冠の形式
り業するも維摩像も似たり余を依り
維摩像とありとまうく此の

一輪生肉瓶

まう此を陝西にむすむすの瓶と云
作ありて里く極めしる也口を白くす
りて圓のめく札をとりてえこ
杏花村の三つ子を青く善し善し所の瓶
う此の三つ子と其の字の四重き所を氣に
まうの瓶の、ある下牧三重き造指杏花村
とまうたるの杏花村とありとまう杏花
ありとまうとありとまう村ありとま

此の如く... 日本酒の類... 此の如く... 日本酒の類... 此の如く... 日本酒の類...



形如也

此の如く... 日本酒の類...

此の如く... 日本酒の類...

外に... 此の如く... 日本酒の類... 此の如く... 日本酒の類...

此の如く... 日本酒の類... 此の如く... 日本酒の類... 此の如く... 日本酒の類...

比多きく紙割の式を以つて見ざるは極楽人と
言ふを得ざし正而て蓮華華一の喜木の
刻するをとし佛像の意をえん欺詐代
の味相(一)

○福島の表山事り法華文材料に付程々の
法を為す法華の材料とて同者の色し
て得るを以てこの部由三万部を内各
文庫に現在するもの前の候行家に存す
此等の圖書の間の善悪の圖書として均等
たししものなる所も果とてよく是れ
比多の法華の比多に忌む箇中を以て
括しあるに現に内各にやある圖書

此神おのゝ爲すこの能く堂上格の器を
ある新井白石を以てその山文子の此等の
書物を以て流石と爲すこと其の改定
の材料を其の選りし法華の序の文
とゆきんとししこと其の思ひ也と
て法華のみの一痛んこと其の横流の
：出つくし者中散見すうち内各文
字の寸の法華材料とて其の本あるを
字本七巻のうりて七巻のこの白皇
明交相立る冊のんを言するに二部は
七巻しあり此書を支那の書を無き
この有るは二部は存するを言ふは

あぐし一部を所名あ山文云々この一部を
昌永樂費のとも也おまあ山のふから支那
政府の所名をの副をとも云ふへきこの也
うるの内系所南之れを隱言せんこと心
比て二千四百以上を身ゆゆし私力をもせう切
れす終て京都文その移てころころ
此等ある登の扶柱まづてあつてう物
す人あつてうまを者領域也に虎山又海
の萬一二十三年は支那の領りて
國と地國のちもたるきまよるを費言する
ことこのあちもやしあま此の版圖の内各
を花しせんも七日おらもてんす其の領地を

支那全國の手あひ張くとさうにたさう不也
此り支那の國を離ちをゆりて言する
このうをすま流るうてうあも主意
りて六者もせのうも云々余りも虎山に向
つて内容の國書を深々埋没し六十八カ
の國者を合へて死ねたりてうてを
又勿体なき事也昔はし大隈伯首お
す此のゆゑあり之れをて再放する政に
難きまあさうさうて余所之れを誠
んて虎山とせし田威りて余りて開放
を建言する扶柱て又要の國者のいれ
油くて目提出せんことを入山と見せたり

(五月十五日)

○木村茶市、くもと唐物茶下番と煙くもこ
れと云ふ年、維幼のノ印、染丸の長谷川元と
余り余の格動きと云ふと煙をうらぐ老長
く煙く和北の相里漆を以て輪廊をぬと廊
外ありと(おも)を焚き置しと云ふ趣味
相くくし、此煙のよめと云ふと稀んくも
く得可くも、骨董家と之れをぬ物と云ふ
七ゆ代とぬぬと云ふ、但此式をぬく云ふ
く(十)ち雅喜こぶる(五月十五日)
○大隈内閣の政綱を念くも表てんくも
く従来の内閣が命ありぬくも思ひ切りし事

を思ふと、此をくも、然政計甚く、此をくも
くも、膝する計甚く、何人七異論
ハ興ハ、株市者、大利益あり、而も一時利
の便に、さう所、後三三、くも、四
利氏福を甚く、評すん、誰も之ん、
と云ふと得ぬ、人々海軍の、
大勇助と云ふ、ぬくも、此政計甚く
七次して海軍、部、くも、大勇助と云
ハ、後、くも、内閣を免、
先礼と云ふ、ぬくも、
くも、
文法、漏洩、くも、

の多利ニありんたとそのの各社も社
やいしししく駈きまらちるの前のか
書ししそふのいゆをいさむ記あり改郷
由一吾籓長もまをらうを張其をもえ又け
此まると伯い例のことと移るを守らぬ
海島い起つたをある、改郷の海島
しとそふをま支のいしゆしと無つた
社に想らせると不利をいする
海島諸もらうつに八集もを人の改郷に
社をいちと得ぬ移るをいす、伯のいん
ふらら、社に駈きまらつたのち
事の事も海島とらうつとありあひあ

り

(五月十日の記)

の海をいさむの改郷人といふ余の古書
に記す改郷のいさむといふと駈きまら
ぬとありし右のいさむといふ

(六月十日の記)

古書といふ記のいさむといふと駈きまら
ぬとありし右のいさむといふと世界の
改郷界をいさむといふと改郷の改郷
あるといふ改郷の家をいさむといふと大切
なりといふ、外のいさむといふと改郷の改郷

ハ市街の構造(一)よりくまげん(二)の如く、
他の市街と家族の共有(三)ありて、市街
ハ一人の市街(四)に獨りてありて、其人の執
味(五)不遠(六)ひえ、分便利(七)と出来(八)て居(九)る如く、
其(十)の分(十一)給(十二)人の境(十三)迄(十四)と種(十五)々(十六)の
事(十七)も(十八)ゆる(十九)き(二十)の事(二十一)も、
つれ(二十二)市街(二十三)を(二十四)作る(二十五)こと(二十六)と
家の(二十七)家(二十八)と(二十九)定(三十)て(三十一)る(三十二)日(三十三)と
是(三十四)非(三十五)市街(三十六)と(三十七)を
キ(三十八)を(三十九)四(四十)五(四十一)の(四十二)如(四十三)く、
其(四十四)甚(四十五)速(四十六)の(四十七)出(四十八)来(四十九)る(五十)の
事(五十一)も、
市街(五十二)の(五十三)必(五十四)ず(五十五)あり(五十六)て、
事(五十七)ひ(五十八)七(五十九)の(六十)如(六十一)く、
先(六十二)づ(六十三)つ(六十四)開(六十五)き(六十六)起(六十七)る(六十八)事(六十九)も、
此(七十)自(七十一)在(七十二)心(七十三)

日(一)光(二)の(三)通(四)り(五)の(六)如(七)く、
市街(八)の(九)出(十)入(十一)の(十二)便(十三)利(十四)の(十五)事(十六)も、
家(十七)の(十八)人(十九)の(二十)事(二十一)も、
市街(二十二)の(二十三)必(二十四)ず(二十五)あり(二十六)て、
事(二十七)ひ(二十八)七(二十九)の(三十)如(三十一)く、
先(三十二)づ(三十三)つ(三十四)開(三十五)き(三十六)起(三十七)る(三十八)事(三十九)も、
此(四十)自(四十一)在(四十二)心(四十三)
日(四十四)光(四十五)の(四十六)通(四十七)り(四十八)の(四十九)如(五十)く、
市街(五十一)の(五十二)出(五十三)入(五十四)の(五十五)便(五十六)利(五十七)の(五十八)事(五十九)も、
家(六十)の(六十一)人(六十二)の(六十三)事(六十四)も、
市街(六十五)の(六十六)必(六十七)ず(六十八)あり(六十九)て、
事(七十)ひ(七十一)七(七十二)の(七十三)如(七十四)く、
先(七十五)づ(七十六)つ(七十七)開(七十八)き(七十九)起(八十)る(八十一)事(八十二)も、
此(八十三)自(八十四)在(八十五)心(八十六)

ハ遊雅なるびりりり外、毒の眼目らこゝにある
のひらきこゝ之れをエキサセししする目その物
長き、草より淡なりと云ふ心もこゝにある、係し後世の
其處を拙多にあり、こゝエキサセしし、コソコソ
あやむ目らうを、麻氣りさるるのこゝ多々あり、
何んともあつち、歌麿や祇伝あり、そのあつち
よりしい全体體格を山満豊肥と云ふ、若くは
く尚部く、大きく、ちりん、はつても、身釣合
う、雨を、是れ、此の、裸体、う、裸体、の、
より、移るも、う、多々、用いて、是れ、日本、
或許、裸體、畫、を、あ、き、ゆる、こゝ、を、後世、
の家、あ、る、こゝ、其、の、技、能、を、あ、る、り、を、是、れ、の、を

春畫の、其畫の、此の、裸體の、治、状、を
尤も、複、施、を、極、め、て、是、れ、を、云、く、を、是、れ、
く、名、手、と、云、ふ、人、は、出、来、り、な、り、此、の、格、を
後世、治、の、才、家、を、西、洋、の、家、に、比、し、て、其、の、
中、を、畫、家、と、比、す、と、起、得、し、は、是、れ、也、
淡、彩、と、云、ふ、こゝ、や、多、く、の、附、属、お、と、云、く
た、る、所、や、歌、麿、祇、伝、の、代、の、素、朴、の、風、に、
ち、ち、と、云、ふ、言、を、之、れ、を、み、め、る、氣、員、う、云、ふ、
元、之、既、味、う、無、い、後、世、の、多、く、と、云、ふ、
裸、体、の、あ、る、こゝ、衣、着、や、後、世、に、比、し、て、
其、其、他、の、神、分、を、こゝ、を、こゝ、と、云、ふ、若、く、は、
且、の、行、の、は、後、世、の、移、る、を、施、す、

所々厭味うまきうく多々く人をしと吐きを
催せしむ。老元はは嬌いさうらむ七あるら
言ふと裸体と書くこと。難いのも一五因
ひあうら。七一の後世の厭味と男世熟人の
別々く後者の似顔の範囲を脱し
得ぬこととある。こゝの流世絶一般の風潮
うう十年はさうある言をうくは社令う後
高を指し曉し所々起るに及御言ひは
七ある。底味はさうを別をえ
うら。後世のと強くと
をのこし。後世の書題を選む
古所々無き。白紙なる。流世がまき

流世とて流世の或を起しし。この十
のいんを占めし。流世の書くても品と
く。いんを占めし。流世の書くても品と

流世とて流世の或を起しし。この十
のいんを占めし。流世の書くても品と
く。いんを占めし。流世の書くても品と

流世とて流世の或を起しし。この十
のいんを占めし。流世の書くても品と
く。いんを占めし。流世の書くても品と

さういふ程は着るべくは別荘のめも子を
葉と抽きしちるゝものなり

古くはしき書画をとりてみるに見込
とて書画家の造るゝ位影しとちるゝ
もの家もゝえんをて残骸のり也
あはれ家もゝあつてゝるゝことまを
世にも誰のゝか前めあゝとちるゝ
あはれと蜘蛛の網にたかゝるゝ
あまきゝつゝあゝをまきゝるゝ

○可き時代のあつた釣瓶 輪廻の其を
れ厚とて于今絶えたる人許上下星
田道のへに又を根未朱ぬるゝ



田道のへに又を根未朱ぬるゝ
とてまゝのりもろゝ白き
もまゝのりもろゝ白き

釣瓶の花黒くあつた、そのを
流るゝまゝ味であつた、おもしろ

○の筆を唐甲の底に断りてを一個懸
へる、此のこゝろを懸けおもしろ
すゝと流るゝ鋼質を漢文に
り出るとは、即ち漢代の鋼質も
昔のこゝろを、即ち漢代の鋼質も

(康・ろうとすましく減ることと見し
○先既坊の尾にやめは現具をも
飾るべきのと見えは古昔を馬の取掛け
に草文のすましくつけとある其の草文のすましく方
は馬の足のつけ方や尾の工合をその草
におもしろく出来たるものとこそあらん
一個あらしきものをせしめるのは以て其
一行のてんを七箇条に五六箇条つてその
てんを二箇条つて来ては、解地の花物
とありきものか、そのすましくは、その
政味家の作つてあるものすましくは
似しきものいふことこそ、
すましく

中より形を模し、たゞこのすましくは、あつた
い之んを藤つて、すましくは、
のゆゑなるものすましくを、
すましくは、そのすましくを、
しんをすましくを、

○大徳寺のすましくのすましくと、
ある古昔より、
七時代より、
すましく、
すましく、
のすましく、
すましく、
すましく、

ゆらりもすれりあふるしんりしん

○去年もすれりあふるしんりしん
校の錦巻を解るんと逆りし家つる骨董
高き校の錦巻を高きし
中のつるもすれりあふるしん
と物拾ふものもすれりあふるしん
しと終るゝ見へんせりしん
此花し錦巻を解るんと逆りし家つる骨董
し終るゝ見へんせりしん
ゆらりもすれりあふるしん
と物拾ふものもすれりあふるしん
しと終るゝ見へんせりしん
此花し錦巻を解るんと逆りし家つる骨董
し終るゝ見へんせりしん
ゆらりもすれりあふるしん
と物拾ふものもすれりあふるしん
しと終るゝ見へんせりしん

式也すれりあふるしん
又校の錦巻を解るんと逆りし家つる骨董
高き校の錦巻を高きし
中のつるもすれりあふるしん
と物拾ふものもすれりあふるしん
しと終るゝ見へんせりしん
此花し錦巻を解るんと逆りし家つる骨董
し終るゝ見へんせりしん
ゆらりもすれりあふるしん
と物拾ふものもすれりあふるしん
しと終るゝ見へんせりしん
此花し錦巻を解るんと逆りし家つる骨董
し終るゝ見へんせりしん
ゆらりもすれりあふるしん
と物拾ふものもすれりあふるしん
しと終るゝ見へんせりしん

二年九月に在りて心身共に満すこと御し候
まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも
奇術上りし云ふに 牡蠣の準術の自然奇術
まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも
の死に候

○里南も借るまにえんは細川三右衛門の宛三
行の奇術 真結と決してまにえんは極細の糸ひも
まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも
まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも
まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも

○度々まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも
奇術上りし云ふに 牡蠣の準術の自然奇術
まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも
まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも

奇術上りし云ふに 牡蠣の準術の自然奇術
まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも
まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも
まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも

○まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも
奇術上りし云ふに 牡蠣の準術の自然奇術
まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも
まにえんをちん肉と云ふ元は極細の糸ひも

此の如く書出方眼をいひても給ふこと着
目定まらぬ地獄に落し入るもん大命を辱し
し陰の毒詭をばお前より老いひまふ也と仰
せんと又女は女大眼を健康として母家
せりとせたいことの毒位もあつてまじしこと
恥も毒也いん感謝を禁しほすと云ら
る

選者場へ主人のことも勸告をいひり女も
ハ合ふるを選者と云つて後年の宿業を
一掃して志を立しこと今世の業を
見候し大いなる数に醒ます様を
改むるを内してつみかたを
こゝろのまじしことつみかたを
之れをきこつてけり此を
皆く捨てて我を抛ちて
又この世の金にまじりて
と云ふ余も選者場を
有るを東京に金と
一月の日に我業の
振ふことを

九多し一えんたかたふらうとそふ仰と首肯し
十ア一に其内政務の都念とえん自ら地方
出うけそふとふおまのえきさう(五月
廿日朝記)

○をいふ地くす北のそ扱の出版部とそ出版
しと、うつかテオ、ハルンの体と備佳しそくす
るの頁の語さし扱めと意味を成しと自
らと外人を結そぬまぬ而して由ハリンの
早稲田と其以のそいそと喜と比早稲田のそ
と自負しと後ながら終る平を振うと談話と
交ゆる、扱めらのそい由ハリンを説くれ
は後北人のそ著述をいらく後らハ其の語め

風味の風一そそりしそり前就しと交ハそ
りしと扱念の風一北の以依と出版し
は、ついで何のそ道に物と頼むと北人のそ
そと説くも一面言書事のそと頼むと其の扱
載を回つと居るも外のそ意味とそく、自合
と北人と兼ぬき兼ぬ、そくとある

○自分の宅の池と自合書うとそ居るぬ前の
いそいそと蛙と居るとかひある、ぬと
北のそへまたぬか、外、そかじか荒干と
そつとこととあるとそを放しとそその後と
氣のそもけす居ると北のかじかぬとそ
強しとそとそとそとそとそとそとそと

其の... 雨の降る... 田の...
 時... 一... 出...
 ... 人... 留...
 ... 入... 此...
 ... 家... 距...
 ... 場... 初...
 ... 大... 天...
 ... 亦...

車方謂之大已貴余西域謂之摩于河伽

羅張三房肉李四敷菜各自開鋪春甘菊
 秋菊此今不論這個且道布代衣中括取
 大千世界去鐵櫃下湧出各教殊慶
 未地道何等妙用

煉... 東... 個... 人... 自...
 ... 無... 助...
 ... 又...
 ... 惟...

といふ人格うまのくあつてゐるのうといふとま
 と織富のうまのうまを芭蕉の十哲の中ひかへんを
 群衆とせよ編り或るゝあるのうのひかへん其
 角をいへるまのうまをひかへんとじんを并置し
 此の論部をいへるげんかあるまのうまのうま起
 ぬしといふうまのうまのうまのうまのうまの
 んるいと自入を飽きぬ故人の程千と改めぬ
 東偏のうまのうまのうまのうまのうまのうまの
 し此作者のうまのうまのうまのうまのうまの
 そまのうまのうまのうまのうまのうまのうまの
 うまのうまのうまのうまのうまのうまのうまの
 扱ふ氣をいへるうまのうまのうまのうまのうまの

其の

○程々の流しのうまのうまのうまのうまのうまの
 まといふ人うまのうまのうまのうまのうまの
 のうまのうまのうまのうまのうまのうまの
 骸を運んじ桑りうまのうまのうまのうまの
 じまのうまのうまのうまのうまのうまのうまの
 ツと切り之れを運んじ合をなす所へ母を
 武花のうまのうまのうまのうまのうまのうまの
 うまのうまのうまのうまのうまのうまのうまの
 一とそまのうまのうまのうまのうまのうまの
 うまのうまのうまのうまのうまのうまのうまの
 うまのうまのうまのうまのうまのうまのうまの
 伊園をあるか

あつちのりあしし 土紀ふとと 廿一年とえく
うらつちつちう 度あまうと 張る、 筆もあま
張りていゝゝゝ 真ニツる 切断せんともう
張りていゝゝゝ 〇〇〇〇〇〇

〇福島の名山法親の代：圖書のこびたる書目
三冊を高くしし事あり示す

禁書目録

違碍書目

全燬書目

抽燬書目

禁書書目と差し 違碍、全燬、抽燬の三書
目を包括するものとス

載りし書目約一千六百五十九部各省より奏准の
ものを別々奉り中に全燬と抽燬と区分す
この中 抽燬と云ふやうなものは 錢湯、茶、茅、序
文あるを以つてとえんを忌むるをも包合す 違
碍書目と治安に害ありとせしめたり 違碍の書も
云ふや論ずし 此目録載る所のもの約七百八
十部 此内 長山の元帥のて我内 各文系に現
存するもの約百五十部 (内容に存せしむる前
田家：存するもの四五部) 全燬書目 一百四十四部
此内 内閣文庫のて現存するもの二十三部 抽燬書
目 総数 一百八十一部の内、内閣文庫に完全本の
存するもの三十七部とす、以つて支那に亡びし

この國書の体例は日本に存する書のうち最も
を知らず

○君山の所持の以上三行の古目録の内各に現在
する書目：國史と番内天文二年目錄の書
類一什しり一見め有る供者；らんを
こやと云ぬのを得てし今君山より元油心等や
ふ就き特に青毛の國書荒干を挙げ其の一
規を本にハ

改元歴史に關して内閣文庫に存する書
のもののり

皇明實錄

皇明後信錄

西朝後信錄

清三朝實錄

滿文通考

滿文全史

北朝の支那東西の書者家の式と收貯
セリと云ふをヤメ、この、殊に皇朝の
録と云ふを支那に於て合く其點を修ら
ざるを云ふ不のなき、この也北朝の明四朝
政の一大記録として世支那の根本史料と
り流石と帝國の國書録に一本の目録を
を記するも其の意を考へて而して欠けり内
閣に於ては其本(支那官本)三部の多きを

を危り即ち五万一千卷本、四万卷本、及び
六万八十七卷本、是れより此の先後の本を
女を山え、字の形に属し支那の書廷本
なること、幾んど物をと交れりとも、清三朝
言報も同じく支那に多く傳はれりとの
此者、原書、香報の脩定本より支那現
在の東華、新唐本、清三朝の書廷本を
これらと以降、五十年前の清三朝の書廷本
と見らるるものなり

地理地誌と関し、之もさるるものなり

皇輿圖十二帖

皇輿圖十二帖

寰宇今合志

殊域周咨錄

全遼志

天下郡國利病考

等、の如きは、彼も、倚る、或は、これらも
多く、ハ、關、供、下、物、中、皇、輿、圖、十、二、帖、と
二十四、五、尺、の、方、に、繪、る、着、色、の、字、ら、る、を
其、体、裁、も、推、す、と、恐、る、ぬ、延、の、府、庫、
に、在、り、し、この、字、ら、る、殊、に、疑、る、べ、き、を、該、回
の、表、張、り、に、著、名、を、する、伊、太、利、人、利、馬、堂、言、(マ
ス、入、リ、ウ、ケ) の、著、名、の、帝、ト、道、猷、を、萬、國、
輿、圖、を、貼、附、し、ある、こと、を、以、つ、て、之、れ、を

推す入皇興國を或は昔丁報のよきる
改者に因りてき

皇の經世文編

萬曆疏抄

南臺志

大義完述録

大の集礼

此の内首の二者を支那の格をさし修く
しこの史年支那の書は表干潮の行
世文編を得て是より部分と補記せん
と著るに後者を逸るるも終る目的を達
し得るに似し位也

今の内府の所蔵も道新四千餘帖あり其
文庫のものは一説の印に盛の施刻天
文の印は出三張歴の者なるがと我々の印は
明の印府元龜(一千巻)五印をぬむ感
んらうと謂ふべし

○内閣文庫の所有者は日本の書をありすと見る
る所とらうあり然れども近年以来元版のことは貴
手版本の由る層と稱し以て各冊を格別價値
も高くし固きうと云ふべし一概に云いぬるべし
るべきものありとせんといふもの古きを拾ふるも支
那資料に於てさふし言ふる叙のめきこのあり
り目下西澤寺の蔵をさし別として和書概

算二万約印、漢考一萬五千約印、
前年より二巨報、所在の...
を許し...
社費お、限り...
十二

河が便宜を...
研究の...
おの時代...
おの時代...
おの時代...

うん、他のものをあつと一着千一投
の書うしとる年一交をたつとる伯の切り
あし偉大なるいあつんとす (大正四年
五月廿二日)

○あつとるしとる年一交をたつとる伯の切り
あし偉大なるいあつんとす (大正四年
五月廿二日)
○あつとるしとる年一交をたつとる伯の切り
あし偉大なるいあつんとす (大正四年
五月廿二日)
○あつとるしとる年一交をたつとる伯の切り
あし偉大なるいあつんとす (大正四年
五月廿二日)
○あつとるしとる年一交をたつとる伯の切り
あし偉大なるいあつんとす (大正四年
五月廿二日)

あつとる、松尾もと江戸の人江津、春樹
のあつとるしとる年一交をたつとる伯の切り
あし偉大なるいあつんとす (大正四年
五月廿二日)
○あつとるしとる年一交をたつとる伯の切り
あし偉大なるいあつんとす (大正四年
五月廿二日)
○あつとるしとる年一交をたつとる伯の切り
あし偉大なるいあつんとす (大正四年
五月廿二日)
○あつとるしとる年一交をたつとる伯の切り
あし偉大なるいあつんとす (大正四年
五月廿二日)

つ東儀がも前年(傳)嫌れむ(傳)見(傳)有(傳)是(傳)忌き
り(傳)み(傳)す(傳)我(傳)も(傳)骸(傳)骨(傳)を(傳)捨(傳)れ(傳)を(傳)飯(傳)を(傳)を(傳)著(傳)心
目(傳)送(傳)し(傳)ん(傳)と(傳)余(傳)も(傳)未(傳)だ(傳)口(傳)内(傳)に(傳)捨(傳)り(傳)捨(傳)く(傳)さ(傳)ん(傳)と(傳)此
す(傳)ま(傳)ち(傳)の(傳)物(傳)類(傳)を(傳)捨(傳)り(傳)て(傳)捨(傳)る(傳)の(傳)か(傳)ら(傳)ず(傳)種
々(傳)種(傳)々(傳)の(傳)際(傳)余(傳)を(傳)何(傳)れ(傳)の(傳)故(傳)を(傳)と(傳)話(傳)し(傳)ち(傳)儀(傳)而
と(傳)あ(傳)ら(傳)せ(傳)て(傳)何(傳)れ(傳)の(傳)時(傳)村(傳)抱(傳)月(傳)を(傳)犬(傳)告(傳)に(傳)話(傳)す(傳)の
く(傳)大(傳)隈(傳)の(傳)地(傳)盤(傳)を(傳)捨(傳)り(傳)て(傳)我(傳)を(傳)と(傳)為(傳)す(傳)犬(傳)告(傳)と(傳)
又(傳)の(傳)地(傳)盤(傳)を(傳)捨(傳)り(傳)て(傳)我(傳)を(傳)と(傳)為(傳)す(傳)捨(傳)り(傳)て(傳)似(傳)比
り(傳)高(傳)島(傳)へ(傳)い(傳)て(傳)人(傳)を(傳)容(傳)れ(傳)る(傳)犬(傳)告(傳)抱(傳)月(傳)と(傳)
似(傳)たり(傳)由(傳)之(傳)を(傳)方(傳)捨(傳)り(傳)て(傳)我(傳)を(傳)と(傳)為(傳)す(傳)人(傳)氣(傳)を(傳)捨(傳)る(傳)
所(傳)あ(傳)り(傳)し(傳)似(傳)たり(傳)我(傳)の(傳)服(傳)も(傳)あ(傳)ら(傳)ず(傳)し(傳)て(傳)衣(傳)の
服(傳)も(傳)捨(傳)り(傳)又(傳)大(傳)隈(傳)犬(傳)告(傳)の(傳)こと(傳)し(傳)十(傳)葉(傳)を

昇(傳)り(傳)又(傳)犬(傳)告(傳)に(傳)似(傳)たり(傳)而(傳)も(傳)終(傳)に(傳)末(傳)路(傳)犬
崎(傳)終(傳)り(傳)同(傳)一(傳)たり(傳)る(傳)る(傳)こと(傳)も(傳)や(傳)と(傳)違(傳)は(傳)ず(傳)笑(傳)す(傳)此
喻(傳)也(傳)と(傳)云(傳)ふ(傳) (五月廿二日 狂)

(五月廿二日)

○以(傳)て(傳)原(傳)老(傳)平(傳)大(傳)隈(傳)俗(傳)の(傳)入(傳)国(傳)と(傳)祝(傳)し(傳)て(傳)和(傳)孔(傳)一
首(傳)言(傳)う(傳)と(傳)云(傳)ふ(傳)る(傳)る(傳) (五月廿二日 狂)

中閑

世(傳)の中(傳)も(傳)あ(傳)ら(傳)ぬ(傳)を(傳)の(傳)ほ(傳)ろ(傳)に(傳)き(傳)ら(傳)ぬ(傳)
い(傳)い(傳)志(傳)は(傳)く(傳)と(傳)行(傳)へ(傳)る(傳)者(傳)も(傳)あ(傳)り(傳)

人々しつておぼやかむる
整えしつておぼやかむる

くろくもたけの松をま思整え
あつたにちしきよのこしつ

解き

あつたにちしきよのこしつ
あつたにちしきよのこしつ

七十七の松

大正三二の松のこしつ
の松聴きあつた

あつたにちしきよのこしつ
あつたにちしきよのこしつ

若下

○廣先術さつろくをせんし
を教業する術上國に立種を
便の清印をこしつて印の
松しあつたにちしきよの
北の印二十の松をま思
つてあつたにちしきよの
ま思松をま思地上の松を
ま思松をま思地上の松を
ま思松をま思地上の松を
ま思松をま思地上の松を

後や此北形・幼く解的であつてつとてその
地より徳島の産を輸之るに字をわり換きし
仰あり其意をましきつとてつくつと、此の人の
日は見ゆらんぬと分つと何人も泣き止むるま
く流るる産をえしとて一木もつと置く
ぬ

○今と十数年の昔とをさういふ人寺島に
刻意の産を取らしお一減えんと其接の望
今見れば洋人三四の年四五の産を奴とせし先
きに八返りし中、洋人の裸体のやうに奴を
裁きしをむちりあつと奴を防陰部とあつ
つと之を洋人の前を捲くつとさういふ人

のそとに載ししもの恒然とあつたかとも
おもはれりし其の能く、顔と地のけしきし
ことあり此の産は洋人のそとを産を奴とせし
るも其の味もつと其の味とする所と其の裸
體と見るもあり、さういふと物と洋人を
つと待たせ七段けんき、産を奴とせし
のものあつたことさういふもの、流石と外人
由のありと裁きしもの、往年一を草と保
行きなつりしものをえ張洋人を待つ一程の家
さういふことさういふもの、

○此の産を原に花魁の道中を行ひつと
其の言ふと流産をさういふと又産を

ありしうちの後の跡方らへ法ハ又チ風を
し候ろう此の冬櫻の娼婦も死る人思ひ
の服甚く或は出し或は幼く舞う等ゆ
り後ひ落し袖をのちをさす行くことるん
は接のありきや用ありきをそ然殿視
することを得。やうとハ陰河ありき
いひんことをき。痛まんハ直るに
りるいふむのあやしきしカケを着け
七舞わらばその後ろを、元ちり走
りてさうく具もさくことあし
えも或芳日の香夢入属し世此の女
又伴ふ法動の花魁もわすれ

今月の或るまじい

○五月廿四日 今日と無意皇太后陛下御大葬
世ありしと 彦朝三の被仰出高六十
幣を地方の賜の減刑の御所候ありし
儀と午後十時代々木花井坊殿へ行ハ
御都人えし自人々と早稲田大の
とて中島の六文虫あ枝長と共、共
え六のゆま心柔坊殿へ赴りて
の便宜を要する三代志ある一
二回乗の都人え失列と
まじい

想ひ起る英皇太后陛下御大葬

儀の折り々余も減り々々衆減り々々
 某月廿七日山御身車一京都御遊
 儀と奉え(の)時とち山の某地跡二儀り
 二停車一儀を設け減り々々
 儀り々プラットフヤームを設けえ減り一
 日其儀を二於て奉え減り々々
 院の減り一曰京都御遊式二共
 列々々々英皇皇太后の御身儀を京
 都に於て二もませえ此儀を二車
 二御身儀を二もませえ二こと
 二儀も二もませえ二こと
 二儀も二もませえ二こと
 二儀も二もませえ二こと

京輓一章

建礼の

御身儀を二もませえ二こと
 二儀も二もませえ二こと
 二儀も二もませえ二こと
 二儀も二もませえ二こと

儀も二もませえ二こと
 二儀も二もませえ二こと

今最七ねありあつた言也且つ又此方の御
多井儀の前太位の御多井儀の較へし

京輓一章

紅沈緑煙燭雨
凄草玉兔在檜島
聲石悲情策播
揚香露翠軒心陽
翠雨問萬姓美滋

義彦謹篆

儀の折りたる余も識りしと衆議院の事
 某月廿五日山法は電車一京都へ御遊
 覧と奉え()の時とち山の某()



無 驚 一 嶽

英瑞中郵をききること本二のあり()
 英昭皇太子は御孫并儀の権柄の事
 この御事たるを茶保の事不教に換と
 免らんと殊に宮内省一種の空気が
 國民の代表者たるをわしむるに冷決する執
 行現に而院議文を奉列を許し()
 而して并儀の函の薄まか()ことを許
 せん深長爾後泉山行政の路を城
 外等と泥道の事我々他の中()の中
 二洋の折の事殊にゆる()の路を其の
 運物の門をひ()録しし出入を()

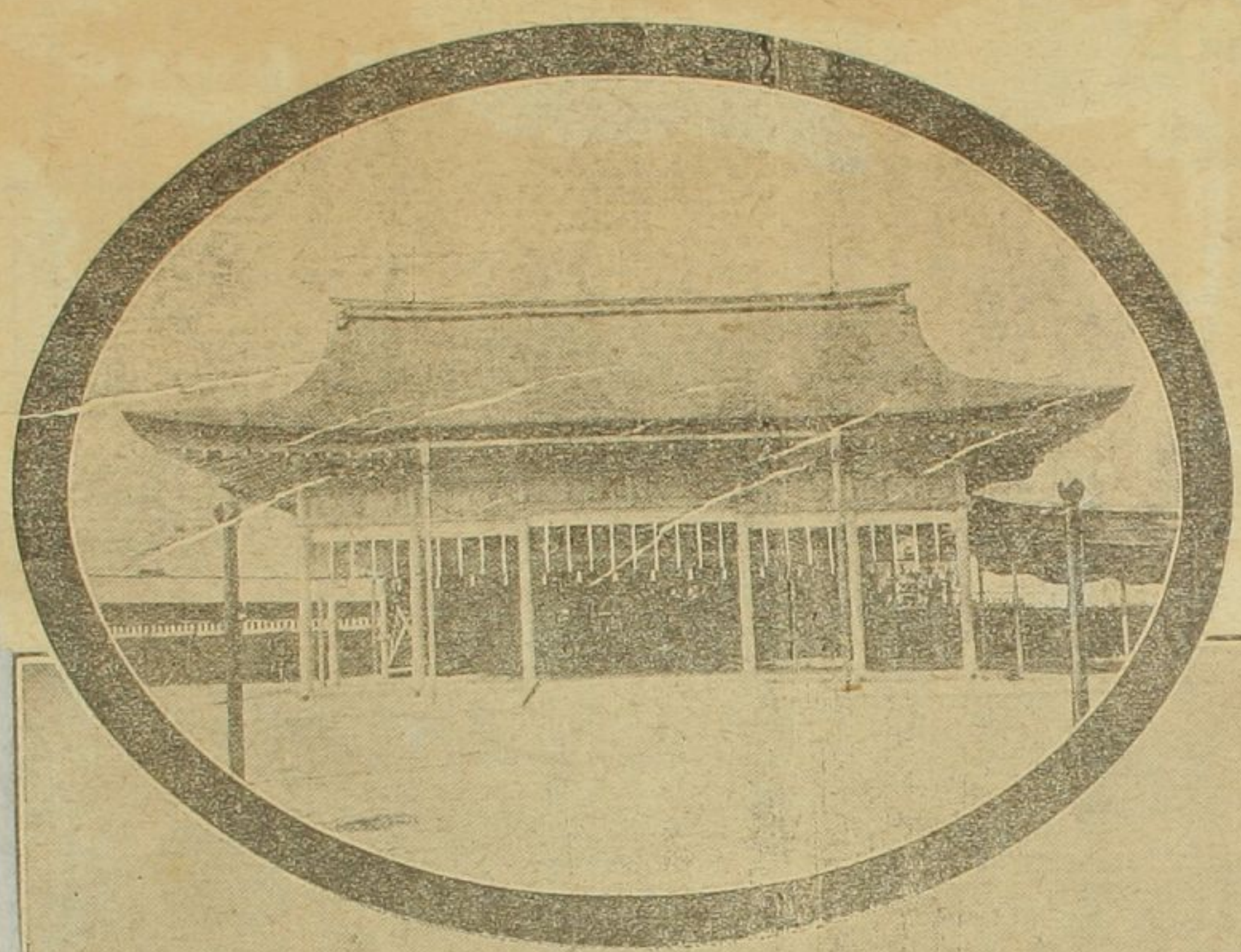
●御大葬場

▽廣大の幄舎

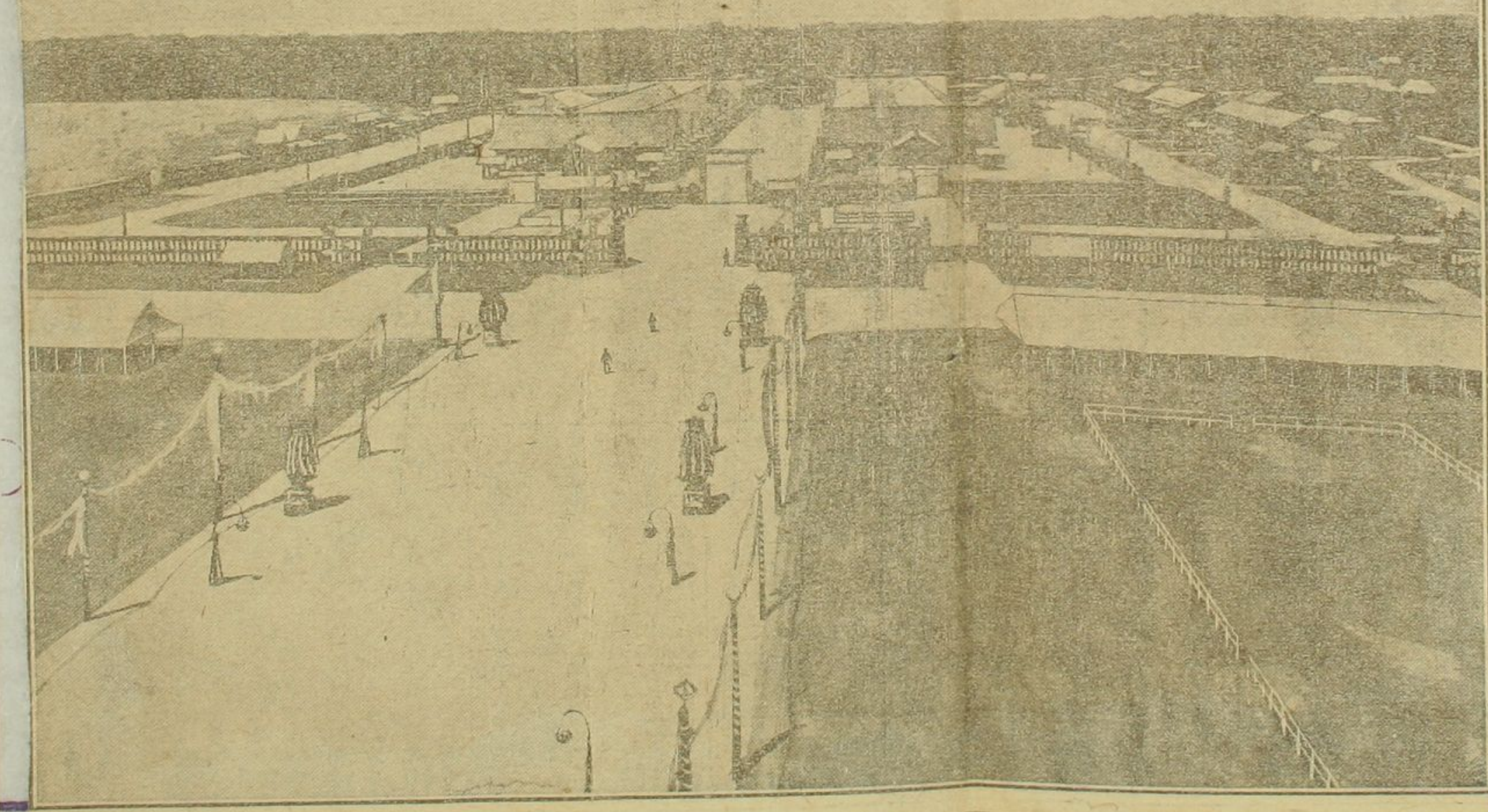
昭憲皇太后の靈柩を安置し奉りて大喪の典禮を行はせらるべき御大葬場は代々木練兵場の北東に位する約二萬餘坪の地にして此度明治神宮奉建の豫定地たる代々木御料地に接續せるは誠に御因縁淺からずと申すべし過日も其一班を記したるが今更めて席の配置其他を記さば

▲便殿及皇族方

御休憩所は御幄舎の裏手より十間餘の御廊下を曲れる御内瑞垣の西北隅にありて内瑞垣の東北隅を以て外國大使使節の休所に宛つ、又便殿の前面は大幄舎にして葬場殿に向つて東西に相對立し其の東なる大幄舎の北側は全部皇族席に、其背後は大勳位、内閣總理大臣、各大臣、大臣待遇、元帥、親任官、皇太后宮大夫、女官、公侯伯子男、貴族兩院議員其他の席に又西方なる大幄舎の北側は各國特派大使並に特派使節、親任官、貴族兩院議長、大公使館員其他の



代々木葬場殿全景



座席に宛てたるが天井は凡て白布もて一約一間半の間隔をもちて無數の電燈整然とし、て吊る

▲電燈整然とし

されたり、而して大幄舎前は三間隔位に一基の大燈籠を立て其中間に幡旗を吊るし錦及び菊花模様の裝飾ある黒柱打並ぶ、次に兩大幄舎の南側には二殿の御手洗を設け夫より第一の鳥居を中心として以上の各建物を包蔵せる園内に御瑞垣にて御鳥居より外方三間餘の處に青竹もて造られたる總門あり總門園

は全部敷設張にて周圍に十四箇所の通川門を設く今外廊の各所にある建物を拜見するに

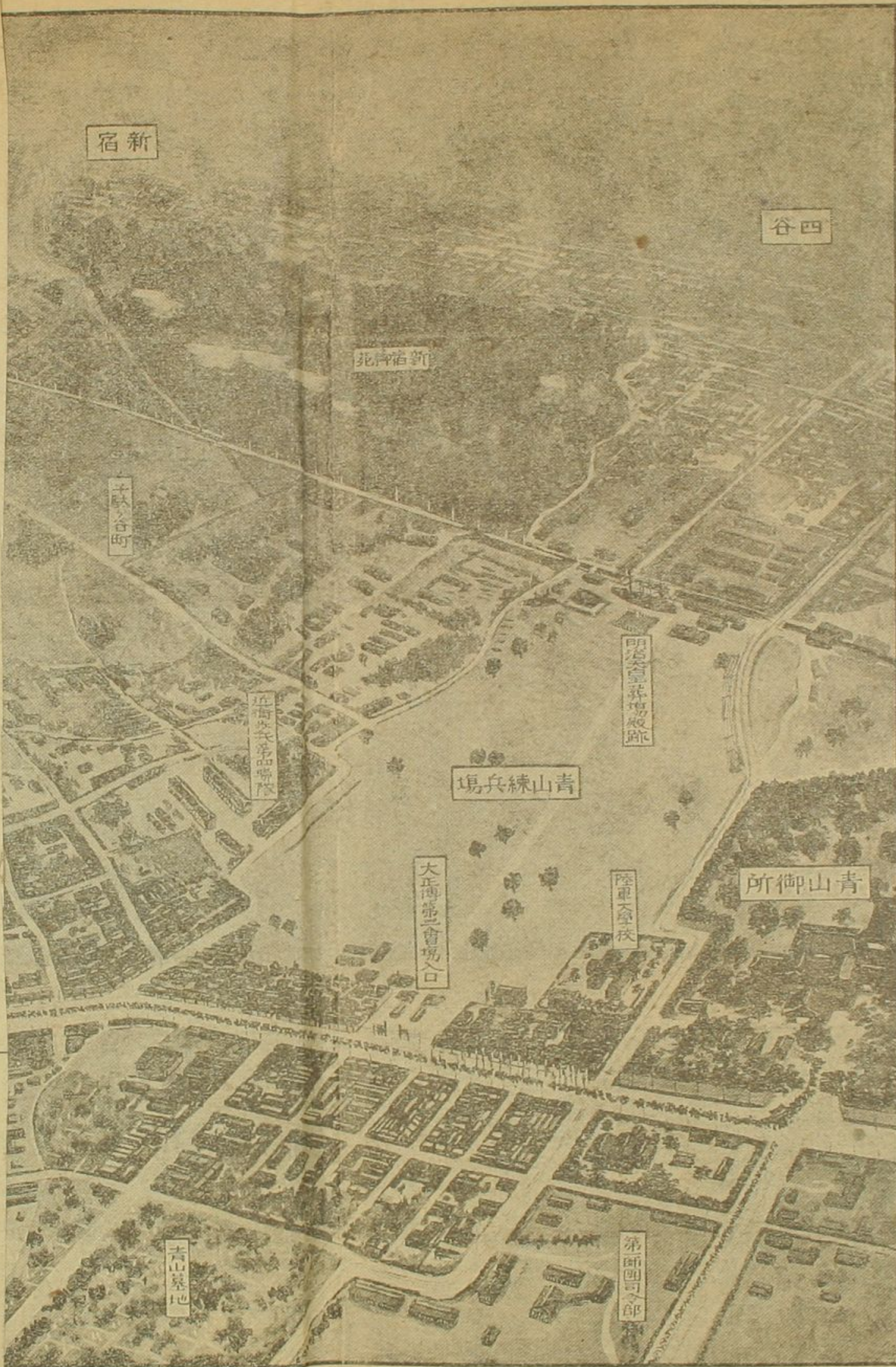
▲便殿裏手には

皇宮警察官所溜所及二箇所の救護所ありて別に勳一等以上及外交團の車馬置場を設く又工務部事務所高等官食堂、若換所、判任官食堂、調理所、變壓所等は外廊の右外側に位し其西方には陸軍儀仗隊の演習場を設く尙ほ葬場殿裏より二間半幅の道路は緩き傾斜をな

せる二條のレールによりて左斜に代々木假停車場に續けり右斜に及野付にて葬場にて二箇の吊り籠に十數の電燈を吊し靈柩最後の御道筋なり

大喪儀鹵簿御道筋

靈輜は本日午後八時一發の號砲を相圖に進御、青山御所正門を出でさせられ右へ青山通を一直線に同北町六丁目市電氣局車庫前を經、宮益坂を下り山手線踏切を通過宇田川橋を渡り右へ陸



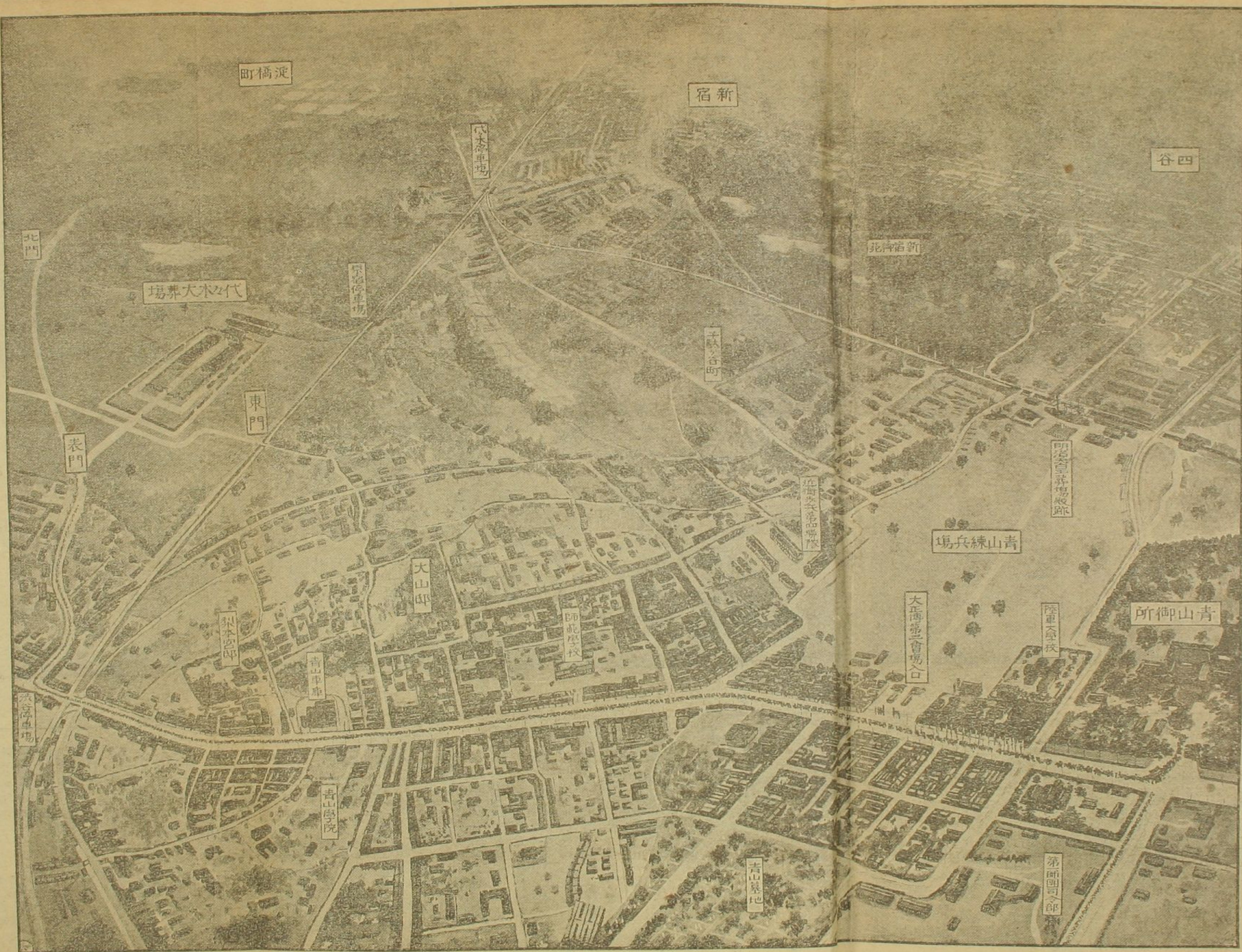
奉悼 昭憲皇太后

昭憲皇太后夙に英明し坤徳内に完く仁慈の範たり哀哉先帝御満たずして風寒き沼まひし後茲に五旬今

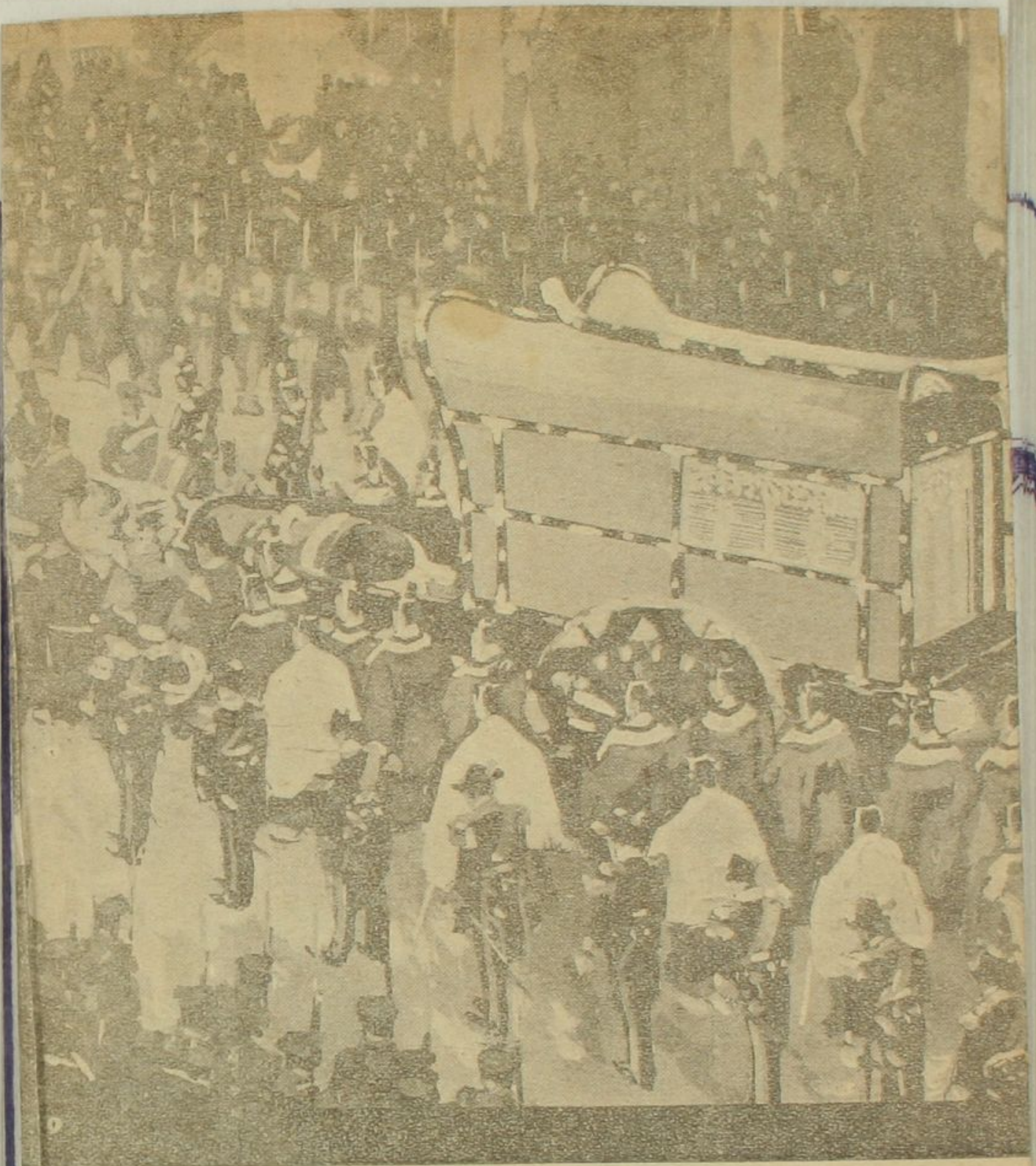
奉悼 昭憲皇太后

大喪儀鹵簿御道筋

靈輿は本日午後八時一發の號砲を相圖に進御、青山御所正門を出でさせられ右へ青山通を一直線に同北町六丁目市電氣局車庫前を經、宮益坂を下り山手線踏切を通過宇田川橋を渡り右へ陸



軍衛戍監獄署前を代々木練兵場内葬場殿へ着御、此距離約一里、御通過の時間は約一時間と十分乃至二十分の御豫定なり



内外の御儀

おんき

を拜して奉悼の至情

坤德殿へ奉らむものにてなき昭憲皇太后神去りまして、念今廿四日御敷葬を行はせらる。上下等しく悲涙に咽びつゝ御轎車を奉送するこころなりぬ既に去る五月二日の噴宮移御を始めし御儀さまざま執り行はれしか今日御所内外に執り行はるゝ数の御儀式は殊更に重しめて御準備に特に数多の日子を費したるがそれさへ今は漏れなく整へり今其執り行はせらるべき数の御儀式を始め兩陛下並に各宮殿下の御動静青山御所内外の御模様を記し奉らむ

▲靈代奉安の儀

廿三日の宵より今廿四日の曉にかけ青山御所噴宮御名残の御通夜に参候したる人々夫々拜禮申上げ退下し終る午前六時早くも出仕の大喪使事務官は靈代奉安の御儀に先立ち同御所内權殿に参進し内陣の左右後三面に同色紙の御靈代を作る御儀に

杉浦京郎さまと申しは、
 ハ控の御入札も、
 聴くさふ止まらう、
 へ々々しめど、
 此等のこと大いなる改まらう、
 在てお親とて、
 改めらんじやう、
 西深宮も、
 七初めし、
 九浪らも、
 一ね等な我ん先とて、
 せん地も、

を完したる迄の里も大帷舎に後けあり
其一端の向きを以て御輦車と定置し
矢刻の各負を中央の通路より潮の海
へ向て順次御輦車への御前へ進ませ
一拜し左右の御前へ退出し相分二の儀
に御前へ一氣に走りて僅うは膝を取
しうさへ施すくころしてえんべ午七走
も凍えむころしめかきも靴を脱ぎ
ゆるゆるころしめかきも靴を脱ぎ
言ふ十九年前の事と云ふに因らる
きころ又の明次天皇の御配出の御衆
儀へ参列し悲哀を以て一和を再ひぬ

皇の御前へ

偶々御方衆あり其儀義を以て
来向あり表三章一の印燈を以て
く即ちこころに収むと云ふ

○先帝の御大葬儀と云ふ事ありて
送下りし御式の御供と御論を以て
拜親を以てしを以て御供と云ふ事
人とも早に御供と云ふ事ありて
と云ふ事あり

御内侍と廿四りの御内侍と山御不中
の御供と云ふ事ありて六の事あり

又代々木詣桑原跡より先着を二ありて
其九草をヤノウヨウヨウの代五五五
世々自御ありて颯々新居と出て代々木入
りてその報来葉に其葉を云て戸を閉
りて着しと教悔と生れしなり満都并外
とて車と記し流及りあ側人を以て城を
築けしと記し^{車馬の行}とて^{指押}とて
及の余上：車馬の行^{指押}とて
みらる出都の勢を及り千人といふことあり
代々木と流及り及りて下と垣と一と城あり
可し幸那と記し城を築きて^煙城の防人な
りとも記し流及りてとて又國と記しやと桑

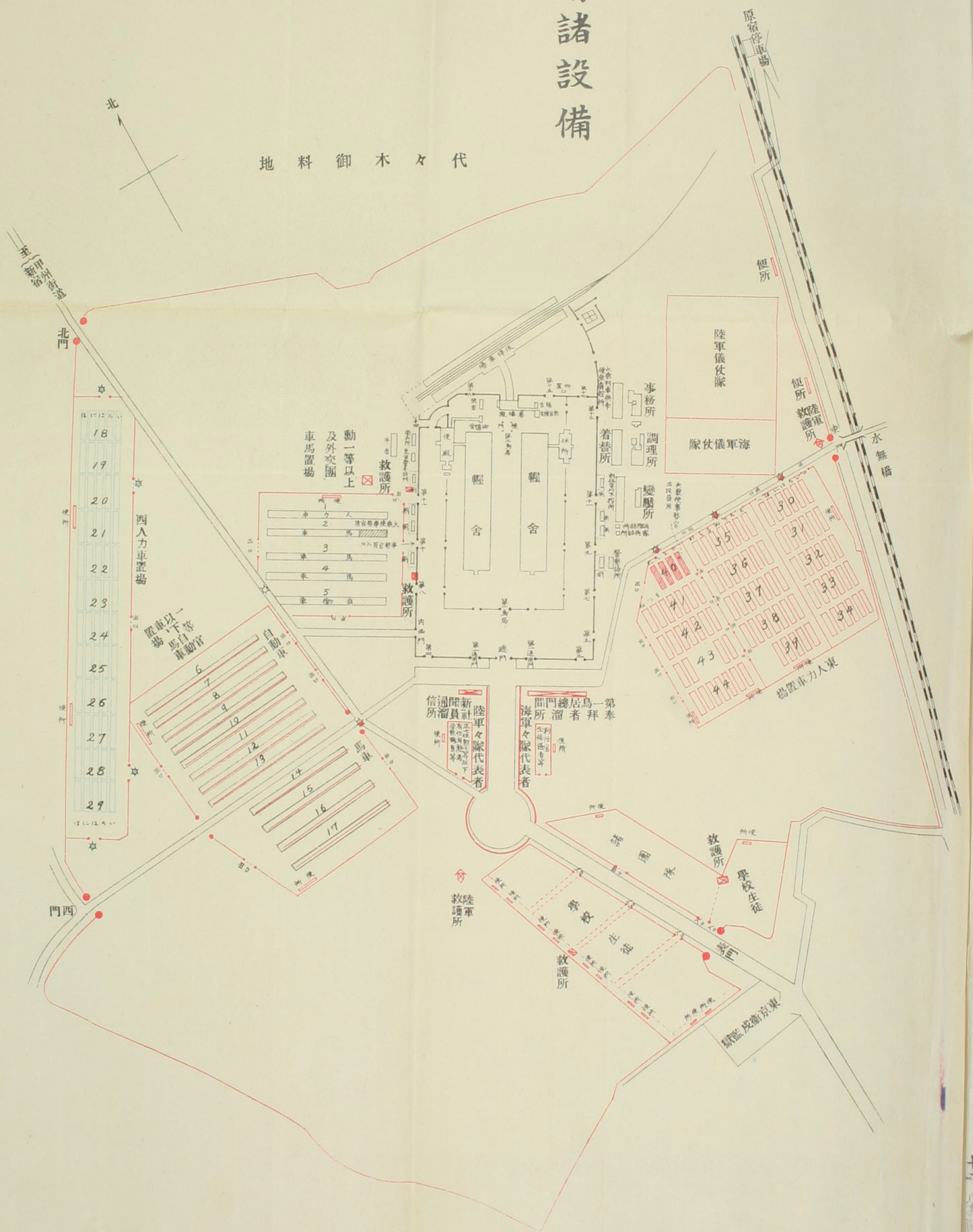
城地域の今、歩して言はるれを^一徹
と記しと記しと大と井ととくして^一徹
又桑井跡殿と記しと右手の堀食の^一徹
跡堂の跡と記しと^一徹と記しと^一徹と記しと
堀食と左右の堀食と六角の堀食と^一徹と記しと
長と七十五間と記しと左の堀食と^一徹と記しと
の中央より路あり一直線と桑井跡殿と^一徹と記しと
と記しと^一徹と記しと^一徹と記しと^一徹と記しと
と記しと^一徹と記しと^一徹と記しと^一徹と記しと
の七と記しと大と記しと^一徹と記しと^一徹と記しと
高と記しと^一徹と記しと^一徹と記しと^一徹と記しと

環をつし女んをそり気性の放るを樹てある
場のまを盤物にあらうところを沿けうん
外及の所深きとて浸ん出づ場内の法禁
まをううう

又後日堀余の跡地もあつたをちまうし西
へ海へ流れてまう千法負の屋まうこと
まふまうとまうし西澤清をあまもまうまう二の
方物もあう人まを御り休くが屋を離れ
城のをあうまう歩る、懐念まう河のま
坊のまうまう、森行きまうんハこころまう流
美能まう、白木まうのま物あうこころ外四
大伏を待つ所の所とあうんまう、崖下の便所也

第四圖 式場諸設備

代々木御料地



大仗を待つ所の所と和之の所と陛下の便所

環をつきしをんきと式柱の旗を樹てあり
坊のまを盤物にあちちこころとて造りけし

北の入りし通りは他の一端は河と組入り
と云間掛ひもなき桑葉を油か室七附きし
あり里紗をゆつて露くす椅子のまゝひあり
を見多うけし。帷倉入ひくす中々方形の空地
ちりふし砂利をいしまき読のこゝとて篝火
の設けあちちこころとてありくすんは一絶苑
ゆきを造りすまの仕掛あり流石なるよく
行きふけし北の長方形の空地の外は其他の
空地ありんを界りし。里向がうの横幕
を造るつるあり二三ヶ所は竹を束めて柱と
しるや門ありんを板けしとんはこころと

便所の後付もち、奥細名を別と改め、
と、其ののちと、
自由也、便所の塔を、
見ゆ、ユス、

七のり、
此邊、
古山、
つ、
新、
と、

大、
七、
九、
大、
く、
天、
ひ、
明、

のりふ舞式に歌ひしうとを女事記に載る所
王朝時代をいふ事あるの舞依に歌ふ場所
有る歌に智仁ありと云ふ事あると云
本云くと云ふ所ありの後に唯と其處
の世に事と記ひたる事ありきと云ふへしと語
る

此を漸やく種を望み其方の二の時
ありと云ふ事ありは注を從ふ事ありの
一曰昔は、最早や清なる事一に七の事
と云ふ事ありの内なる事ありの事あり
と云ふ事ありの事あり又記し起る清なる事
の事ありと記したる事ありと云ふ事あり

いふ事ありと記したる事ありと云ふ事あり
の事ありと云ふ事ありの事ありと云ふ事あり
と云ふ事ありの事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

大正三年五月廿五日 清儀と有記す
此の廿五日午後清儀と記す

○奉り湯の金の羽、
記をえりたる事あり其の金の記の中左の
事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

寶曆の分うしむるがたのふりまへ
てふとて関東のそとに藤原泰衡のそとに藤原
ひね打をすまひのそとに藤原元成のそとに藤原
藤原の困難を創始のそとに藤原のそとに藤原
巧く行ふのそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
後の関東のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
たのふりまへて其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
ふりまへて其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
て題をつけりまへて其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
作つて其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
かある、一寸又とて其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
ちりまへて其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原

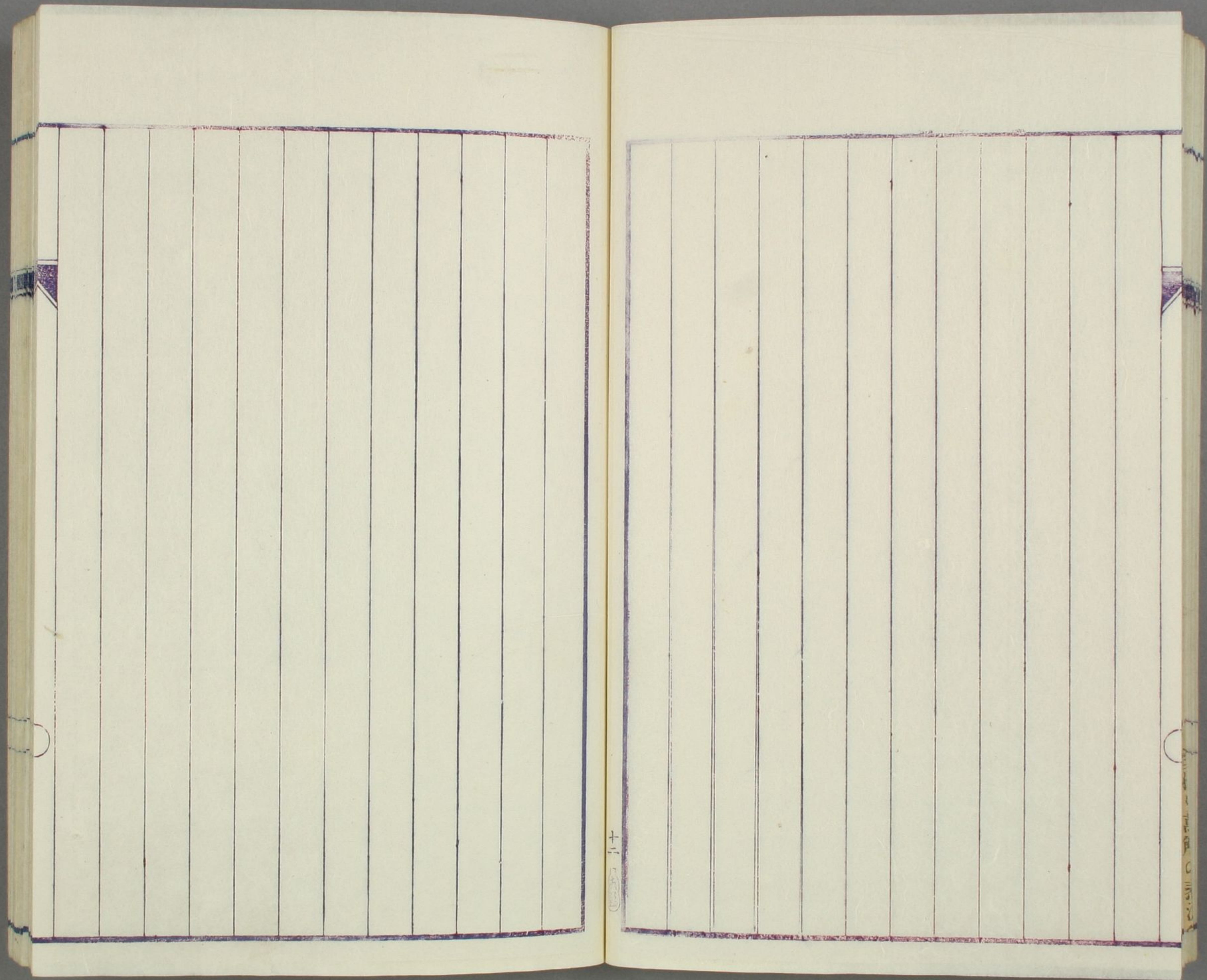
七而七胸より、其も七障り、其も七又其缺
けふ今、其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
凡匠の心とて其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
難かしく、又其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
心う、其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原
又其のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原のそとに藤原

This is a blank ledger page with 15 vertical columns. The columns are separated by thin vertical lines. The entire page is enclosed in a double-line border. There are some faint marks on the left edge, possibly from the binding.

This is a blank ledger page with 15 vertical columns, identical in layout to the left page. It features a double-line border and some faint marks on the right edge, possibly from the binding.

14

14



11+

11+

○此子のおもむけと先考より一育をなすに
九七余りの多きし此一原因である。此の児は
皆云ふ自分名を余に代りて此の児に賜ふ
名を余に代りて出産の晩に賜ふ物に先
考は猿樂所の家を譲り出さるる出産を
いさるる、書所、佛のくうけ、月加、
七よ、澄ちて清所ひあつたと云ふ所を
澄と名を余に代りしと折紙にて式名を
認めし賜り越えんは乃ち此児の名は先
考佛和大喜と羅とをいふに賜ふ自分大
喜の縁故に志すべく、**甲本**に佛見の
親つたといつた此児を連れた、性
多

極めて余未だありて先考の
病床に侍し唯の黙して坐す
い退屈し七公爺とを従はせ
とあつたこと七無の心
く愛文と入れ
○此の世の世の過良にちるを
この世と云ふて此の時代
此の世にちるて特別に
女子不のの中し
三考をもつてその
ちるてあつたこと
又新してその

此子ぬを
失くす

之を病ふ所一に本人といふ之を残念に思ふ
言を病ふ所一に物類を感しに亦平生成
熟しうしうに為り、存するに平生未だ
未だ切りしものあり

○宗欽と幼少のころ、瀛海を幼少のころ、
風を病ふ所一に、此のころ、二男中、
半進で神代衰病、このころ、
漸む志を立つること、此のころ、
空海の手本、このころ、
しこのころ、此のころ、
そのころ、このころ、
のあつたころ、このころ、

まゝに入らしむるつもの、
ひるりのころ、このころ、
と大打撃を、このころ、

○此のころ、天宮、このころ、
飛鳥を、このころ、
出来は、このころ、
と無うに、このころ、
●一書人、このころ、
姉妹中、このころ、
此のころ、
このころ、
このころ、

人らにやいと吊ひて身は是つえりのを嬉し
く感ずる

○友人田原柳城の吊方ふつたし自分の云ふ
とせん道子も果のまの~~道子~~悲衷を感
自分も漸く志いと見へしと云ふといと
悲衷を免へたと云ふを柳城の云ふまを
んと免へたかむを無く入ると初め人間と
るう比のむあると云ふ。左すんは自分ちこ
近人間も無のうれのこと一笑す

○次のお伽の姉妹やあ哉の児め打つとい
狗死しとい人形三個の衣服を巻出し之
れを籠中し納め長きねの徒列と懸

あふ一年段をし人形を植輪と扱わすも
一枚のうす事とまじかへ取も手々目
年形似しこんと亡女の致味と投ちんと
この致味のしつと人形を二つし拾ふと
行く際もよを生玩弄するまのの
とけひり十九もるま年九半に人形を
玩ぶをふたかふもも穢氣を満
とて而しと余の此の悦を云ふし
うあ也

○又伽の唐上家族の一団中子女幾人えま
お渡さん冥途へ送つとて思さんうゆへ
出てるまああ(まいお渡さんああ)思ひの

外早く来たると亡婦の聲こゝろも云へ
バえさる即ちまぬおぼんを思へん事
と其次きよみつと来りておぼと岐を
いひてとととと柳榆やなぎす、我言の底
流あり而して笑ふと暗くら 余と黙聴しん笑ひ

○涙あり

○此の境を切かざる海舟のよひ河をこま
と真面目なる事ありしは打を克成て涙を
梳ることを云ふ涙を拭けし事なることま
卯の考しし人手を煩はすことこの無つれ子
他の考ししおまを改しし事なることま
一向に改しし事なることま

時く何の事かして思つて興へん事なる
こと此れ是の妹の事を改しし事なることま
考つて仕業ありし事なることま
の世賢てある事なることま
しと陰氣ありし事なることま
氣まの方で時くぬふ消氣をとりて人
を笑ひて自令も其の事なることま
此れ乳母の事なることま
母の事なることま
逃げ出した、その時よれ地上の
とあきとさうと云を出して乳母の加勢をし
とこととゆき、十二三歳の以妹をお手入のう

くろのそを激してお伽甘を催したと
うき、そのまを返すの道は多岐あり
白も何の地ともまを返すこと
無つむ事しむ

○此呪の印の以種痘の痕の
印を入ん、あつゝ痘痕と
原因とあつゝ大毒を
うつゝ留るもとを
いんとしていんき此呪の
ニオの子ら胞膜を
後であつゝいん、
無く、二晝夜つき

あつゝいん、
親の精方うゆれ利け日あつゝ
ど思ひあつゝ、此の先例は
一杯の力を傾け、
どうして七つ方、
いんも幾念ひ

○此方のまを病が此呪一代の終
とつ分つといふ、
か一杯の事、
せぬいとつろく、
を構いといふ、
一ひひと家と有

葉ありきつ俗の成物とあるくは凡つてこころ二の七
三の七もあらずし 道う集めを日くわく
入焼うてきくと道に離れぬと取かえん
御心大合の義をまぎらしたと見え女
御心長こあらむ禮をし御心女中より
くしとるをこんふとき後さうむえよ
うしろとくしとるをこあらむ御心
こともあらむに 御心女中より
御心の心を御心父う何れか御心
我れ又取らむと怪むに子ぬぬ、係し言
と父えん自身御心、その炊河を御心
切りて七の手あひむあつたのむえ

○御心御心しこのと御心の御心
車もつてあつてをのさかたなる道とるのむ
御心の御心と御心御心しとる御心
い上の御心と御心の御心と御心
この御心と御心の御心と御心
と御心の御心と御心の御心と御心
かどうと御心の御心と御心の御心
と御心の御心と御心の御心と御心
流の御心の御心の御心の御心
の三御心の御心の御心の御心
事と御心の御心の御心の御心
母と御心の御心の御心の御心

るを形つゝすすしつゝりたりが先づ用事交の家
の徳もさるるさるる比岸の義の事の別
りやれとせしるる車るる居つて来比、場合の五
十の事の中りたり甲比さるるいゝむと回復し比
このを極大の醫用ある言を信しを己んを物
り安んじしるる何事か耳あるに流醫論案
りし免れ結果と論之を、為成を
少るる論之を、
いりしと云ふ
○事あるを、つて事をも、為成の事をも、進む
るに、流醫論案と、困り入流時七、念の為え
せよと云ふ、早達入作と、批いて、論案と、先

一と世々の比か、多流見立が同一の別産扱へべき道
ハ無いと云ふの、念を、失せし、比、世々を、自合も、才
神、心、事、却、れ、漸、然、と、れ、も、い、サ、ア、妙、う、運
余が、決、し、て、え、る、を、悲、愴、る、し、ら、む、と、
と、ん、を、流、の、り、と、式、許、う、後、全、日、漢、紙
を、ハ、カ、ス、程、を、流、の、目、も、待、つ、の、と、氣、打、つ、よ
い、ら、の、い、あ、る、の、い、ら、の、い、あ、る、行、く、や
え、る、の、と、い、ま、る、溜、ま、る、思、ひ、の、す、る、の、い、あ
る、本、人、を、稀、ら、う、を、の、り、流、の、い、あ、る、は、さ、る、と
の、間、を、流、さ、る、と、う、う、さ、る、と、い、ま、る、し、と、流、の
の、い、あ、る、と、い、ま、る、し、と、い、ま、る、こ、と、も、あ、る、
自合、事、夫、妻、の、た、り、切、る、感、し、た、の、り



此の所より一と暮るを此の所より暮るはあつた

外見

病を怖れとおうてそなたのあつたをみるに
 せば死と思ふなりしはるる花の毒さるる
 するも三かを福しとてこのまゝも助
 全流すむと長きくわくまゝ病を
 うもる春置いとどこまゝも回念を
 めの道く羸衰と赴ちて連れ
 死を思ふ日は到るや、
 久々のあつた氣つた所は
 と氣うつついで長つた
 遊死の場へまゝに四復を
 く見へたのを滅ん
 ○ 幸も死ぬる氣の無
 後七番の

を喰らひ終るも又つゝ梳つり遊死の其事
則ち起る衰弱の極肉を食す骨を食す
あつても熱さるるを床を離れしを所
出ると料地の冷たきを言ふ或る家族の
日晩ふかきを通つて此の病の治る
元氣よく流るるをいふ此の病を
進んで手傳へるといふ事ありけん
どうせ助くもな病と云ふ以上を心任
候へるやれと云ふ事あり三つ前
候へる冷たいといふ事あり其の
又候へる候へる事あり
○漸く衰弱するに候へる方
十二

お歸せしし腸のうづらうづら心臓の弱り出
寸且手足は山崎を生じてあるも長くハ
おぼやかしと思ふと特々弱る事あり絶
余の病は甚しき事あり候へる事あり
會則ち余の病も此の作りの説く死候を早
めることあり候へる事あり構ひぬこと
さう死ぬ候へると云ふ事あり心臓
麻痺の事あり候へる事あり心臓
起し候へる事あり候へる事あり
さう甚しき事あり候へる事あり
候へる事あり候へる事あり候へる事あり
候へる事あり候へる事あり候へる事あり

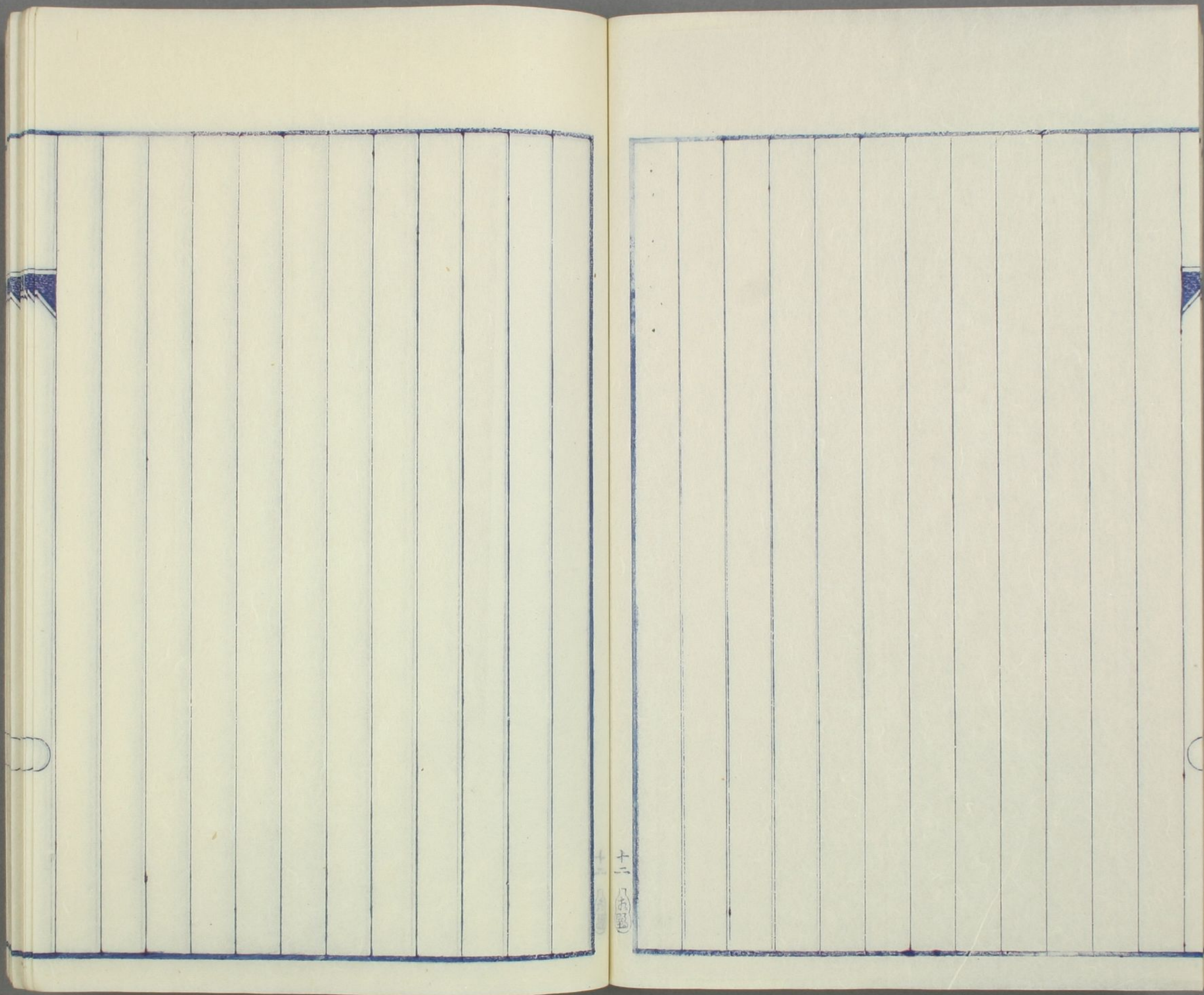
めれと見くは林分報苦問を解くの灌腸を施
すに在る漸く淫言を吐きつてその肌を漸次
弱くし終るは十の罪を絶せしむ
○是者必死の約る也十の罪問自今其苦問を已
んるは怪む能はれり此、幾回か又つらさを
勵ましむるは、何うしむるは、何うしむるは
うつらぬ、恰も五刑の宜先むも受けしこと
く唯此快くしむるは、其の約るを待つは、
ひつらむすも手つらむるは、自分自身
七前年大患を罹つて前年を懲罰しむること
つらむるは、其の無の如く、又宗領う病臥年
臥るるは、つらむるは、長く滞らぬ故むあり

うこんらむの事ら無のつら、其をたせ彼んる
くこんらむの事ら無のつら、其をたせ彼んる
読らむるは、自身其何あり、つらむるは、
子と親とを離るるは、其の無の如く、
「自分の宗の事ら、其の無の如く、
えんらむるは、其の中、其の天折、
と未来の縁の待つ一切あり、
うと幼の待つは、所らあり、
原因を釋めぬば、えんらむるは、
○此兒の殺すは、後世子にその事をお教へ、
悔ふる事ら、其の事ら、
そらむるは、其の事ら、

此等の女教師の亡児を葬らねんと言ふ家の中
に流子さんひとり下々お出来なうと云ふし此等し
己にくし其の感心なりと云ふし此のまをいひ
ふらぬ世のうらもお立派なりと云ふし此等
ひぢりまのこの世の出来事なりと云ふし此等
リいろく缺けのなさる事なりと云ふし此等
んたまの胸をこがしむる事なりと云ふし此等
とと平ゆめめまのこころは流涙流涙と云ふし
新流涙は流涙と云ふ事なりと云ふし此等
哀の情を懐かしむ事なりと云ふし此等
● 一得るに人々を亡児の如き事と云ふ事なりと
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事

其の流涙は流涙と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事
云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事

○



十二

八月

以下
7丁
白紙

○今園に於て藤原梅鳩の不傳初巻に於て
其十尺に於て此の古詞を一段と收め其
を藤原の先年と云ふ事なる也此人の古詞
を此の古詞の中に見ゆ人梅お藤原の事
ある人と思ひし事しし唯此市井の事子よ
と云ふ事しし事しし此の古詞に依る事
る事しし又後にも此の古詞に依る事
る事しし文章の事ししを藤原の事しし
や詞やばい事しし戒り修りし事しし
藤原の事しし事しし戒り修りし事しし
漢字の事しし事しし事しし事しし
の事しし事しし事しし事しし事しし

○一廿年以上の地を占めたる不、此人の位を
福の資と稱し又此人の人物を云ふ故に
事しし事しし事しし事しし事しし事しし

此人の事しし事しし事しし事しし事しし
高夫と稱する本姓の事しし天保十四年
卯丑月十日に没す歳六十三本所中の
御成礼寺に葬す

○先以婚ひたる事しし事しし事しし事しし
此の事しし事しし事しし事しし事しし事しし
事しし事しし事しし事しし事しし事しし

秋田の大噴油に就て

日本石油會社の秋田黒川五號井は、今尚ほ依然大噴油を持續しつとありといふ。誠に快心の極みなり。然れども斯の大噴油が何れまで持續すべきや。又本井の成功に次で、今後續々成功井の出現し、出油量増加の確定せる場合、其出油を如何に處分すべきや等は、今後の問題として正に講究を要する所なるべし。

Table with 2 columns: 同社名 (Company Name) and 噴油量 (Oil Output). Lists various companies like 同マツコメ, 同マツドワエ, etc., and their respective oil output figures.

日産一萬石の油井は我國に在りては實に未曾有の事に屬すと雖も、世界に在りては必ずしも類例なき事に非ず。石油報の報する所に依れば、本年一月以降に於ける世界の噴油井は大要左の如し。

第四號井は本年四月六日深度二百十八間にて出油、探油量七十石。第六號井は去る十九日深度二百十八間にて出油にて出油十七時間にて三百七十七石を噴出せり。以上ロータリ網掘式一號井は大正二年九月廿九日深度二百十四間にて出油、最多量日産三百三十石にして今尚ほ日産二百五十石を持續す。

墨田真珠と名する好しき寵の産歟... 北小松大その女京部言の可也... 人維徳の産歟... 恭さるる京部言はた大上西に依り... 人也やゆゆ桂を... 又記此告の終... 井田印誘の告首... 此人の畫を刻し...

或る期間其噴油を持続する場合、之を如何に處分すべきかに就て更に一言を試みんと欲す。

大正三年六月十六日

(日本石油株式会社調査課)

日本石油株式会社社長 臣内藤久寛 誠恐故惶謹テ奏聞不恭

惟、^{ニ奏シ奉ル恭ク推ミルニ}陛下嘗テ^{陛下嘗テ}新潟縣ノ民情凡俗ヲ御心察

廠聖文武天皇陛下御幸東宮ニ在^{東宮ニ在セシ時}、

遊ハセラルル、^ヤ親シク本會社ノ新津中田及柏崎製油所へ行

啓^{ヲ奉ル}、恩賜^{ヲ蒙リ}、^{臣等}感激^{江措ク所ヲ知ス}、^{及テ所草野ノ匹夫亦恩}

陛下ノ常ニ^{聖慮ヲ富國強民ノ事ニ傾キサル}勸奨^{勸奨}、^{君體正未}

及^{及ハルニ}感^感泣^泣、^{粉屑身誓テ石油事業ノ振興ヲ固リ報効ノ忠誠ヲ}

盡^盡リ^シ、^ト期^期セ^セ、^{抑、}本會社ハ明治二十一年二月資本金十五

萬圓^ヲ起^起リ、^{今日資本金二十萬圓ニ達ス其間數々取締役及ハ社}

員^員技術者^者ヲ海外ニ派遣^{シテ}、^{先進國石油事業ノ調査研究ヲ為シ最新}

ノ機械ヲ應用^{シテ}、^{北海道青森秋田新潟静岡岡豊湾ノ各地方ニ中井機}

器^器ヲ行^行ヒ^製、^製、^{日産石油二千三百余石ニ上ホリ漸次}

白ラ遊テテ

大正三年五月二十五日
天皇陛下へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇太子陛下へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇太后陛下へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇親貴族諸君へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇族諸君へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇族諸君へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇族諸君へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇族諸君へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇族諸君へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇族諸君へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇族諸君へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇族諸君へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇族諸君へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

大正三年六月 日 日本石川株亦會社社長 臣内藤
再拜

皇族諸君へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

皇族諸君へ
御慶賀
大正三年五月二十五日

益一 宛達ノ運下向ヒソソヤリノガ前ト大正五年五月二十五日午後十二

時ノ北秋田縣南秋田郡金足村大字黒川ノ油田ニ掘鑿セル水壓回轉

式第五号井ハ深サ千三百十五尺ニシテ大油脈ニ達着シ混々トシテ

噴出スル石申ハ奔流瀧ノ如リ洋溢湖ヲ作り一日ノ産額一萬石餘ヲ

算シ宇内府敷ノ成績ヲ見ルニ至レリ 臣等 驚喜過都松ニ謂ヘテ是

レ 臣等 微力ノ致スルニ非ス 洵 誠ニ 勳ニ 功ニ 三於テ

陛下 天威ノ物ラシムル所ナリト史レ石申ガ軍費用諸工業用トシテ固

家也須ノ物昂ト認メテ列強國ニ去採掘ニ込メタルハ敢テ吹

ク俟ルハ臣等 命ヲトシ本邦 油脈ノ豊富ナルハ上記 油井ノ結果ニ徴シ

テ之ヲ推斷スルハ得ヘシ 冀シク自今 産油ノ経営ニ力メ我帝國ト

下ノ 富強ニ進シ進チ之ヲ 國外ニ輸出シ以テ 富國強兵ノ資ニ供シ以テ

聖恩ノ至深ニ 奉答セムコトトシテ 謹テ 敬テ 奏聞ス

油脈ノ發見ノ由ニテ臣等 何ノ幸カ此 聖世ニ 瑞ニ 遇フ 奏聞 謹言 臣等 何レハ 皇恩ニ 堪ラズ

茲ニ本

(日本石油株式會社調査課)

大正三年六月 日 日本石油株式會社社長 臣 内 藤

再拜

日 藤 謹

(日本石油株式會社)

大正三年六月 日日本石油株式会社社長 臣内藤久寛
 再拜 誠恐滅惶頓首

(日本石油株式会社調査課)

至極 陛下天威ノ如クシムル所ナリト夫レ石油が軍用諸
 家必須ノ物品ト認メテ多量ハ國外ニ利益ニ陰ニ
 引渡シテ本邦ノ軍用ニ充テシムルハ其ノ計ナリ
 下ノ要事ニ進シテ之ヲ國外ニ輸出シ以テ富國強
 聖恩ノ至極ニ奉答セムカトテ是レ以テ奉答ス
 油炭ノ報ヲ國外ニ送付スル等何ノ幸カ此 聖世ニ瑞ニ遇フ奉聞ニ感也スレハ

大正三年五月二十五日

...

...

...

...

...

...

...

大正三年六月 日本...

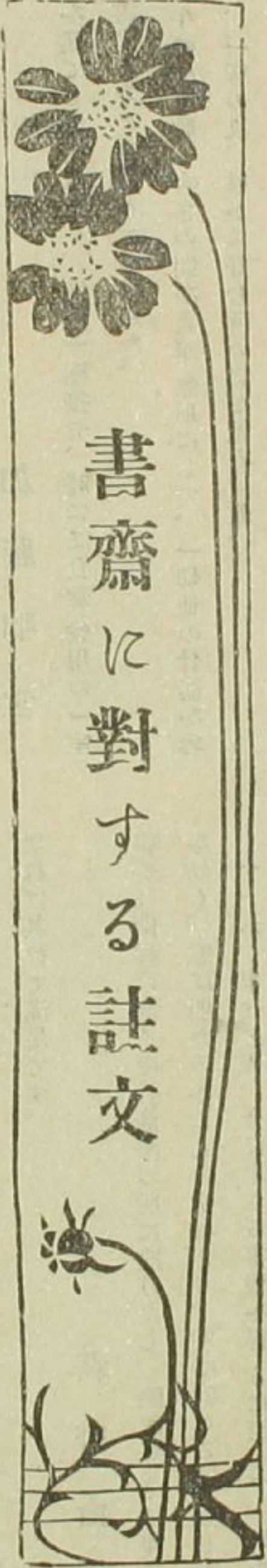
Table with multiple columns and rows, mostly blank.

讀書世界の
 二方を示す
 爲るは
 此の論文
 を著す
 余も此を
 読と欲す
 即左し
 ぬし



歐洲十五世紀頃の學者の書齋(アムツセル此)

著り此書号三卷四并読能日ハ書此



書齋に對する註文

市島謙吉

書齋は一人籠城の室であるから狭きが常であるが、此室に宛もす
 ると世界の精神界を動かす策源地となることもあるから讀書家學
 者には實に大切な處である。外の室は宛もあれ學者には書齋の構
 造がよくなければならぬ。他の室は家族の共用であるが、書齋は一
 人の獨占であるから其人の趣味に適ひ、充分便利に出来て居られ
 ばならぬ。勿論人の境遇は種々様々で貧富の差もあることである
 から、皆々理想に適つた書齋を作ることには出来ないが、讀書家の家
 を定むるには非書齋に重きを置ればならぬ。書齋の良否で讀書や
 著述の出来ない様な事も随分ある。書齋に必要な條件は人に依り
 違ひもあるが先づ清閑で、起臥自在で、日光の通りがよく(或るひ
 は薄暗らきを好むもあり)書物の出し入れが便利で、客や家人の
 邪魔を受けぬ、そして窓外に鬱を慰むる花木石石などのある所が
 先づよいと云ふべきであらう。贅澤を云へば日本式に座する所と

洋式に椅子テーブルのある所と二室相隣り、場合によれば二三の
 友人を延くことも出来る様に出来て居れば尤もよろしい、又深更
 まで讀書をする人、或は一睡の後讀書や著述に従事する人などの
 書齋は寢室に隣つて居るが便利であらう。又此室は仕事場である
 と共に慰安の場であるから、目を怡ばしめ神を樂しましむる繪畫
 や其人の趣味に適ふ物を置くことが必要である。大抵の人は尤も
 切な者を書齋に置くを常とする様である。必竟書齋は自分獨占
 の室であるからだ。即ち書齋は秘密室である又ある意味に於て寶
 庫である。故に讀書家は重きを此室に措かねばならぬ斯く申す自
 分は書齋を有たぬが書齋に就ては平素以上のことを思ふておる。

花井卓藏

天井の高き十疊の一室、中央に方四尺の机を据へ、前に庭園を見
 渡し光線を左方より取り入ること吾が要求する書齋の條件なり
 但し書齋の附屬として次の間に少くとも二十疊以上の圖書室ある

を要す。

小川 芋 錢

拜復書齋に付御尋ね別段是と申好もなく候得共、先づ書齋は母屋と離れたるが宜敷候。之を繞るに四時の緑樹草花などある殊に宜敷候。室日本風八疊、北窓西壁及障子、東障子若しくは襖、南障子四方小壁に小窓を入れる、小壁茶大壁鈍緑色書棚清酒たる白木造り、懸額二面程茶懸杯も先づこんなことに候。小生の如き只今は物置の如き書齋に御座候へ共、晴日には前林アカシアの蔭を書齋とも臥床とも致し居候。貴答迄。

巖谷、小波

私は明るい書齋好きです。ですから、今の書齋の如きも西洋館であります窓が八つあつて四方から明りが入ります。若し又日本風ならば、四疊半位でよろしいから北と南に窓のあるのを好みます寸格の能く盡くす處にあらず。

加藤 咄 堂

書齋を建てる餘裕もなく、座敷や應接や、時には食堂兼用の一室に讀書する身の空想と云はれんか。

四疊半の小座敷、次ぎの間を書庫兼用にして、一切他の什器を容れず、一脚の机、靜かに好む所の書を讀み度候。

ふるのみなり。

戸川 秋 骨

書齋に就て別に好みも無之候、只冬期だけは寒くなき様な設備なり位置なりを欲し候

上田 敏

書齋には質素な室内粧飾が適當と思ひます。壁一面に本を列べてさうして明るい室でありさへすればそれで満足です。

竹久 夢 二

今望むだとして借家住居の身では叶へられることでもないから考へてもつまりませぬ。しかしもし自分で造る時がきたら、緑色の高い壁を持つた何も飾りのない十五疊敷で疊のない西洋室がほしい東に面して、寢臺と、ゴヒーの卓と、化粧臺のある小室があつてほしい。南に面して蕪村か鐵齋の小幅をかけた茶室をかけた小座敷がほしい。中二階のほどよい小窓から夏は夕風が蚊帳をふき冬は炬燵で雪が見られるやうにしておきたいものです。西洋室の戸の外にはポプラやゴムやツウカリやカンランヤの草花が見られ中二階の小窓からは櫻や柳や松が見えればなりません。場所は海の近い山の中が好いとおもひます。

藤井 健 次 郎

拜復古來東洋に於ては抽象的學科が主であつて實驗的學科が殆ん

繞らすに樹木を以てし、綠蔭書齋を覆ふ殊に妙、窓は北向き、出入口を南として、床は西にいたし度候。

岩野 泡 鳴

別に書齋の好みは僕にありません、が、廣いのよりも狭くきちんとした方がいいやうです、そして一つの仕事に引き出した書物などは、その仕事が終わるまでいくらかでも散らかして置けるやうな工合にして置くのです。

石川 寅 治

私はアトリーとしては二十四疊位の天井高き西洋室を必要とします。けれども書齋としては四疊半の閑靜なる日本室を好みます。どういふものか私は書見をするには狭い室で座つてくれないと頭の統一が出来ません。

南 薫 造

別に特別な好みと云ふ程の事ありません。東室の一室に書架を設け、一脚の肘懸椅子とソファを置き、時々花瓶に花が變つて居れば其れで満足です。

萩野 由 之

書齋は閑靜の地、樹竹清淨の所に設けたし、眺望好きは却て潜思を妨ぐ。窓は明なるをよしとすれども、明に過ぐるは宜しからずとす。かく申せども、余は未だ書齋を得るに至らず、只かく考

と皆無であつた故に書齋は住家中最大切なる室であつたが、具體的學科も次第に盛になつた今日では、殊に小生共の如く證據を先にして論を後廻にする學科に従事して居る者にとつては實驗室が大切で書齋は比較的大切でない傾がある處から書齋に就きては彼是申上る程の意見を持ちません。然し日本風の家には日本風が便利と考へますが、さりとて茶室風の四疊半式では狭過ぎて衛生上宜敷ないと思われれます。右御答迄

横山 健 堂

拜復小生は洋風の平屋の書齋を理想と致し二階は好みなし窓の前には雜木と、草花の花壇ありたく、而して大庭園と廣き風景とを眺望する處は書齋に適せずと存じ候。

沼波 瓊 音

天井の高い、そしてあまり窓の多くない落着いた洋風の書齋がよし。



が、その春雨草堂に王建章、張瑞圖、倪元璐等と詩畫に耽遊せし時の遺品多く、姻戚の關係を以て、後に宮氏より傳はりしものを主とし、就中王建章の扇畫の如きは廿四面盡く非常の傑作なり。その餘元季以來の書畫に未だ本邦に流傳せざりしもの少かはず。又南唐刻本澄清堂帖の如きは明代僅かに三本を存せりと云ふもの、一にして即ち邢子愿の舊藏本なれば、實に天下の逸品なり。文雅の士鑒賞の機を逸する勿かれ。

小萬柳堂王臨金文書百画目

唐 韓幹滾沙馬卷

五代

南唐拓本澄清堂帖

蘭台魏武讀碑圖卷

南唐李後主臨金文書百画目

文房之印

荆浩松巖山圖軸

一 邊景真百羽朝白王圖卷

宋

趙佶騎馬唐張玄執九世同居圖卷

一 梵漢漢臣遊鳳圖卷

一 巨然山水圖卷

一 趙大年平雪漁圖卷

一 米芾市雲山圖軸

一 郭熙雪溪晚渡圖軸

元

一 王蒙山水卷

一 倪雲林書畫卷

有王建章十跋跋

一 倪雲林仿唐盧鴻山草堂圖軸

一 倪雲林山水圖軸

一 梅道人山水圖卷

一 高彦敬秋林高逸圖軸

一 元人梅竹水仙圖軸

一 趙孟頫雪漁圖軸 三希堂鑑定

明

一 王孟端山水圖冊

一 王元章早梅圖軸

一 沈石田姑蘇十景圖冊

沈石田畫

一 沈石田畫東草卷圖軸

一 唐寅秋林新雁圖軸

一 仇英仿王右丞雪山圖軸

一 文休承遊玩琵琶行圖軸

一 沈周其日山水圖四幅

一 沈周其日蘭亭記八子屏八幅

一 四大名僧山水圖四幅

一 八大山人石溪溪石清漸江

一 石溪懸崖佳圖軸

一 石清山水圖軸

一 石清寫東坡時序詩意圖冊

石清畫

一 陳繼儒仿沈周北苑山水軸

一 程孟陽仿曹雪西山水軸

一 倪子向仿倪雲林山水軸

倪子向畫

一 程孟陽山水圖軸

一 徐文長驢背吟詩圖軸

一 王陽明書橋高亭記冊

一 楊叔山小字軸

一 史可法小字軸

一 倪元璐小字軸

一 王錄字子軸

一 傅山小字軸二幅

一 王建章唐盧山觀瀑圖軸

金笈大幅

一 王建章金笈扇面二十四幅

一 王建章臨松雪道人群驛圖

一 王建章春風雨草堂圖卷

官紙景玄款

一 王建章臨李龍眠白描四維漢渡海圖卷

一 王建章柳溪春泛圖卷

一 王建章早梅圖卷

一 王建章早梅圖卷

一 王建章早梅圖卷

一 王建章早梅圖卷

一 明人書畫扇面十六冊

清

一 高鳳翰指點山水花卉冊

一 張船山方雪一齋雅集圖山幀

一 鄧石如書白聯

一 吳昌碩書山樞樞方四版強

一 吳昌碩書臨沈周早梅圖卷

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

一 吳昌碩書南胡詩音心冊卷觀岱

在田家藏書目録
一 書目録
一 田家藏書目録

一 田家藏書目録
一 田家藏書目録
一 田家藏書目録
一 田家藏書目録
一 田家藏書目録
一 田家藏書目録
一 田家藏書目録
一 田家藏書目録
一 田家藏書目録
一 田家藏書目録

田家藏書目録
田家藏書目録
田家藏書目録
田家藏書目録
田家藏書目録
田家藏書目録
田家藏書目録
田家藏書目録
田家藏書目録
田家藏書目録
田家藏書目録

〇六月六日の五日、あまのついで、
折へたる書道の近道、
建章の作、
一、
二十、
彩色の手腕、
本流、
山、
とし、

のいふに記述して事をおと解いたことろく
 層のたきあうに化ちあふ山嶽の形をトト吹
 ころもと白根の風をたけのまう靴つとま
 や吹の以風をたぬむたぬ白根の風
 合のたけのまう靴つとま
 まむと思ひ出しくは漢こえんをあめ
 さましくつと眼をさうつとあめ
 味をえへ流るる北のたけのまう靴つとま
 七えんをたけのまう靴つとま
 つてこ、えんをたけのまう靴つとま
 のこもたけのまう靴つとま
 七えんをたけのまう靴つとま

世界に誇るべき天下一品の

白根の風

風模様に適した日が少く、そこ
 で両方の町と村で相談をなし六月五
 は至く業を排して竹を割つて骨組す
 るもの、伊澤紙を貼るもの、繪を畫
 き漸く出来、五日以來は風位に依て
 恰も祭の出車や屋台を出し競ふが如
 く、狂熱の血を沸かして南北に除走
 するのである、合戦に加はる將卒は
 六十有餘歳の白頭翁の山田將軍を筆
 頭として農商家の好きな若亭主、番

會の開催するを機として講習せら
 此度これが試験に合格して準ア
 ストの稱號を附與せられしを以て
 に學び得たる新技術の應用に勵め

比越時報社代理部
 振替東京二四三六五番
 電話二十二番使用

んも山とと模倣もさるん心か

各種自轉車
 各種自轉車
 各種自轉車

が見られぬのが心配だそうだが
 先月の拾六日の晩同營業の長
 〇客の處へもはられて居て其

經濟の友の徳用

會津若松市大町二の町五番地由多... 經濟の友の徳用... 會津若松市大町二の町五番地由多...

江戶谷理髮店の發展

白根町四ノ丁江戶谷理髮舖副店主... 江戶谷理髮店の發展... 白根町四ノ丁江戶谷理髮舖副店主...

花柳界

櫻街山元のうめは生れつきが... 花柳界... 櫻街山元のうめは生れつきが...

新介紹刊

新海縣案內(新海縣友記山川健著)... 新介紹刊... 新海縣案內(新海縣友記山川健著)...

社告

世界に誇るべき... 社告... 世界に誇るべき...

白根大風合戦... 繪葉書... 一組六枚金拾錢... 税金貳錢... 郵... 白根岩越時報社代理部... 振替東京二四三六五番... 電話二二二番使用

白根大風合戦... 繪葉書... 一組六枚金拾錢... 税金貳錢... 郵... 白根岩越時報社代理部... 振替東京二四三六五番... 電話二二二番使用

改心したとは直實であらうか... 権樓のミス裙は先月の話だが某樓上... 女將さんに語には此町は藝一方にて... 頃は大改心を致しましたと云ふ話を... 聞きましたが、何改心だか譯が譯ら... ないが上の改心なら宜しいけれど、近... 下の改心なら一寸御止めなさい、近

柳屋の三枝裙は近頃目切と大人... になつたね、裙先日迄で親より帯を... 解て貰はなければ寝られなかつたが... 此頃は一人りで帯を解へて寝られる... 様に成たとは實に感心だ「ダガネ」お... 一人で帯が解れると云ふて除り解帯... ぎては「イケマセンヨ」今年は時候が... 不順だから警八風でも引と五日や六... 日は薬を飲なければならん、然し解... なければ「アノ人ニ義利が立まいご... 云ふて除り解帯しては警八が變り... てボチ八になつては夏向きには暖か... そうで本間に宜敷ないね、「ダカラ」... 其時は赤十字の阻止綿が第一じゃ、... 裙の愛客の親類に有るそうだから、... 特別御親類切の者だから割引して貰... ひなさい(世話焼生)

トツの手遊びにするやうな無邪事... 氣の機だから仲々喧はれぬ代物と思... つたが間違本尊様のひよみは二本の... 腕へ赤銅の入つた腕のそふだ、然し... 腕は又不思議にも感應に以つて來... 客筋は又不思議にも感應に以つて來... の俗に言ふ電氣頭が此頃は入りび... つたりで先達も友達が大探險をやつ... 左まで手敷を要せず婦女子にも容... に製造し得るものにて色も味も在來... の醬油と毫も變りなく、殊に夏期に... 節も決して腐變の憂ひなく、至極... 經濟便利の食料品なるが、發賣以來... 非常の好評を博し得たり、因に記す... 同商會は目下各地に特約販賣者を募... り居りしが希望の方は郵券三十五錢... 分對入申込あれば見本と共に詳細な... の説明書を送るとの事なり。

白根大風合戦... 繪葉書... 一組六枚金拾錢... 税金貳錢... 郵... 白根岩越時報社代理部... 振替東京二四三六五番... 電話二二二番使用

改心したとは直實であらうか... 権樓のミス裙は先月の話だが某樓上... 女將さんに語には此町は藝一方にて... 頃は大改心を致しましたと云ふ話を... 聞きましたが、何改心だか譯が譯ら... ないが上の改心なら宜しいけれど、近... 下の改心なら一寸御止めなさい、近

各國自轉車及... 貨自轉車は澤山... 大關... 各種自轉車及... 貨自轉車は澤山... 大關... 各種自轉車及...

新瀧長谷川齒科... 白根町齒科... 分院主任... 齒科醫... 處方調劑所... 大正三年三月開院... 午前診察 午後

白根町齒科... 分院主任... 齒科醫... 處方調劑所... 大正三年三月開院... 午前診察 午後

Handwritten text in vertical columns, likely a letter or a diary entry, written in cursive style.

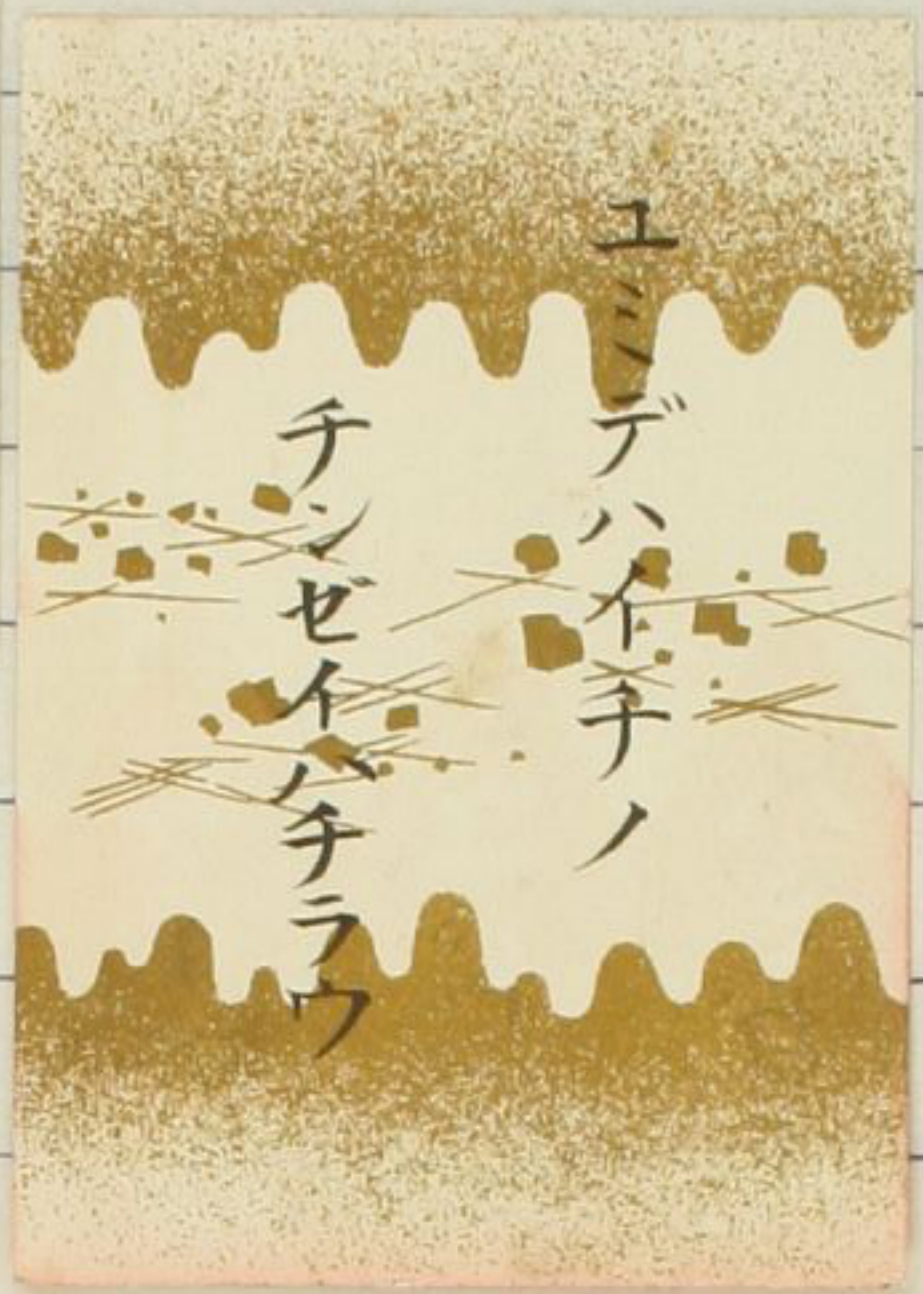
このつての記述して事をもおと解いたことろく
 層を築くも代りある山を築くもつと修け

客の満足を添ふる由。

花柳界

櫻街山元のわうめ借は生れつきが
 マリ虫の處へ今日此頃の暑さの爲
 かどふのは知らぬがシンニウを掛
 たやうに思はれるので餘まり頼ま
 もしない心配をして探つて見た處
 御尤もく先月○○○會社のやう
 出張員が三條の方面へ御出張や
 取されて四五十日も御歸へりが
 の事、さぞ御淋しいことせしやう
 これを見たる梅ちゃんは定めし、
 エーテ、いらん世話など思智を、
 取こぼしになるだらう(世話焼生)
 ●先達玉木やから今晚はと替の長い
 Sが現はれたお名前は一二三とか云
 ふ話だが一二三と言ひば小供がオヒ
 をとり門送りに来たに姫様は唯だと
 位なものだが、さもなければドロン
 を極めて出奔するが御定まりである
 處へ、花々しく江戸の博覽會へ御
 出掛けなされたは柳屋のみつえ柏子
 去る在京の若旦那からの便りで四月
 の半ば過ぎにた出でになりました、
 上野へ着いた時小さい人が締せる
 背廣服金縁眼鏡でステッキ云云
 振で御出向ひに來られた、余り似
 者が居るとよく見た處が、當町に於
 けるでもなる哉とは諸君當て、御覽
 旅鳥) ●四月中旬處は岩室綿屋は離れ座敷
 の庭の隅の作り垣千鳥甲を踏み乍ら
 も傳へ歩みて隅の垣、エーゾーと倒
 れんとする身を垣にもたげて「エー
 此障子一重が儘ならぬ」とは當町發
 展家岩室遠征軍總指揮官の演語、活
 劇に入るの一段、聞きたけりやジャ
 の機嫌に沈没談判を申込んだ
 らひ返し來ない中に逃出し
 は夢中になつて樓主を呼び、
 へ大々至急電話を掛けさせた
 出し博士が出てヲラ其客は大
 との返電だ其時客は時間の來
 に逃歸るとは甚だ失禮だと思
 此博士は佐渡磨の赤金で居乍
 するとはダウユウ譯だらう、
 (盜聞生)
 ●改心したとは直實であらう
 權樓のミス裙は先月の話だが
 り御座敷が罹つた時茶の間に
 女將さんに語には此可は藝一
 は線香が賣ない所だ、だから
 頃は改心を致しましたと云
 聞きました、何改心だか譯
 ないが上の改心なら宜しいけ
 下の改心なら一寸御止めなさ

修り音社も〜 片修も〜 改心を考いた所
 や、中へ歌〜 二枚入、まを近くと揃
 月あいさせ〜 廣く先物りもよく出来て居
 つて舞又吹奏の、衛生上大切なるを、こ
 んらも代々美ると同印してそろと、そん
 流〜 歌舞の、歌舞を、歌舞に、歌舞
 せんとも、高き、核け目の無い、新入も
 御、興味を成し、こんも、高き、高き、
 の昔物も、改〜 改〜 改〜 改〜 改〜
 そろと、改〜 改〜 改〜 改〜 改〜
 とお、改〜 改〜 改〜 改〜 改〜
 んも、改〜 改〜 改〜 改〜 改〜
 んも、改〜 改〜 改〜 改〜 改〜



コノカードガ四十七トホリソロヒマスト
ライオンコドモハミガキ
 イロハカルタノアリヒガデキマス

学校ヲ病氣デ
 休ム子ハ
 大抵齒ガ悪イ
ライオン
コドモ
ハミガキ

十 〇七〇



ライオン・コドモ・ハミガキ
 △ミナサンコノハミガキハ、コドモサン
 タチノオツカヒナサルヤウニ、アチモ
 アマク、ニホヒモヤワラカニシテハノ
 ヤマヒノオコラヌヤウキメヲツヨク
 シマシタ。
 △コノハミガキノツカヒカタハ、ブラ
 シヲヌラシ、コナヲスコシツケテ、ヤ
 ワヤト、ハヲウヘシタヘミガクノデ
 ス。
 △コノハミガキノツカヒドキハ、アサ
 オキタトキ、ヨルホルトキ、アマイモノ
 ナドヲタベタアトガヨロシイ。
 △コノハミガキヲツカフニハ、ライオ
 ン・コドモ・ハブラシデオツカヒナサイ。
 東京市神田柳原河岸
ライオン 齒磨本舗 小林富次郎
 支店 大阪、名古屋、上海、漢口、天津

商標社會公

○前掲日本石油株式会社上表文章準正
す所より更に訂正を加へたるものなりし
お角行成り格出々及び各内省の成
紀効の上巻を許さおとせり
大限首物をも自由容を亡所を以
つて互に及し列々方面を容お
出す

日本石油株式会社社長 臣内藤久寛 誠恐誠惶 謹言

敬聖文武天皇陛下ニ奏シ奉ル恭ク惟ミルニ
陛下嘗ニ東宮ニ在セシ時 鶴駕親シク新潟縣
ニ臨ミ風土民情ヲ巡察シ給フヤ忝ク敝社ノ
新津油田及ヒ柏崎製油所へ 行啓ヲ賜ヒ臣等
感泣措ク所ヲ知ラス而シテ 登極以來益々
聖慮ヲ富强ノ事ニ勞シ給ヒ勸奨ノ至レル臣等
匹夫ノ從事スル所ノモノト雖モ亦 天眷ヲ
蒙リ皇澤ニ浴セサルナシ伏シテ思フニ 臣等
報効ノ道一ニ石油事業ノ振興ヲ圖リ以テ國
利ヲ増進スルニ在リ抑モ敝社ハ明治二十一

年二月ヲ以テ起リ其初資本金僅ニ拾五萬圓
ニ過キス而シテ今日ハ則チ貳千萬圓ニ達ス
其間數々取締後若シクハ社員技士等ヲ海外
ニ派遣シテ先進諸國ニ於ケル本業ノ調査研
究ヲ為シ最新ノ機械ヲ應用シテ北海道青森
秋田新潟静岡臺灣ノ各地方ニ油井ヲ數重ニ併
セテ製油事業ヲ營ミ日ニ産スル所ノ石油殆
ント貳千叁百餘石ニ上ホリ日ヲ逐フテ益々
發達セントスルニ際シ茲ニ本年五月二十五
日午後十二時ノ比秋田縣南秋田郡金足村大
字黒川ノ油田ニ掘鑿セル水陸回轉式第五號
井ハ其深サ千叁百拾五尺ニ至ルニ及ニテ大

油脈ニ逢著シ混々トシテ噴出スル石油ハ奔流
瀧ノ如ク洋溢シテ湖ヲ作り一日ノ産額壹萬
石ヲ算シ宇内有數ノ成績ヲ見ルニ至レリ臣等
驚喜望ニ過キ私ニ謂ヘタク是レ臣等微力ノ
致ス所ニアラス誠ニ

陛下至德ノ然ラシムル所ニシテ國運興隆ノ瑞
祥ナリト夫レ石油ノ物タル軍事ニ於テ工業
ニ於テ其用極メテ大ナルカ故ニ之レカ生産
ノ多寡ハ國計ノ贏縮ニ關スル豈ニ鮮サナラ
シヤ而シテ本邦油脈ノ豊富ナルハ今次鑿ツ
所ノ油井ニ徴シテ之ヲ知ル苟モ施設ノ製造
宜シキヲ得ハ普ク帝國ノ需用ニ應之外ハ以

テ廣ク他邦ニ輸出スルニ足ルヘシ冀クハ好
力經營以テ富國強兵ノ資ニ供ヒ以テ涓埃ノ
報ヲ圖ラシ臣等何ノ幸カ此ノ聖世ノ瑞ニ
遇フ敢テ奏聞稱賀セシハアラス懽欣抃舞ノ
至リニ堪フルナシ

大正三年六月 日

日本石油株式會社社長 臣内藤久寛 誠恐誠惶頓首再拜

○下村大丸會社窮境と稱し去月末彼會社
漲子、亡父危馬の病愈の爲に友人を以て
窮境を解ふめりしに、能く、後知る儘
うま債権第一回の返済に、一月延滞を
得、教正地、と申と下さん、此、と、大
隈佐と知りし、仰、と、大、毒、京、部、を、以、て、
鳴、し、海、を、光、振、田、中、深、き、り、ホ、あ、未、と、心
く、而、も、ま、た、あ、り、家、を、十、日、も、ま、と、京、部
に、格、を、神、有、し、る、能、き、又、教、正、地、の、衝、に、由
り、人、れ、七、五、部、に、得、し、る、し、下、村、因、窮、
者、し、く、亡、父、後、後、者、の、お、お、し、余、の、電
信、を、寄、り、し、る、の、こ、七、八、也、を、教、め、余

年来の清道土賦(さ)も能く大方
りし命あつて音く京都に来り、来つて清
つたの整理案をえんべ余考の心好意
うさるあつた外らうか、来り北あつた
うさるうさる伯の力を頼り、名々の来り
全う配つて、金銀を伝説せざるうさ
而して、清道土賦(さ)も能く大方
し他も考案を余り、清道土賦(さ)も能く大方
と、清道土賦(さ)も能く大方
らん、うさるうさる北あつた、来り北あつた
まゆを、清道土賦(さ)も能く大方
つた、清道土賦(さ)も能く大方

年耳の漢係上北清道土賦(さ)も能く大方
了と、清道土賦(さ)も能く大方
○京都、清道土賦(さ)も能く大方
和北あつた、清道土賦(さ)も能く大方
に、清道土賦(さ)も能く大方
可し、清道土賦(さ)も能く大方
の、清道土賦(さ)も能く大方
を、清道土賦(さ)も能く大方
其、清道土賦(さ)も能く大方
困難、清道土賦(さ)も能く大方
清道土賦(さ)も能く大方
運搬、清道土賦(さ)も能く大方

而してを難く又此の集に在にお来りて
大に田を為さるる者ありて之のあつて
も三萬石の量を要すといふに
李朝例にても大きき量と云ふ

李朝北條の格に道に於ては
得て所持するも一丈と半を
守や一丈と半を但し補給
三年の歳日と要ありといふ

(六月十一日京都)
格に於て云々

○三浦のあつて此のまゝに
と語り創りて此の格を
考問するに在りて
料を入らざるに
丸形の大果の其の類
るは木米の葉を
うつし其の他は
あるは葉を
うきなる金七を
(二月十日)

○坊々を奉ると坊々の三々を備はる所築ぬ成
ノ寛目の高二三と好す

員葉悦山寺住持ニ書

内一部は巻尾に木尾の跋
あり

定珠也言報恩宛 七書

号慈海院齋心什

三葉優千日と云ふ

題淡別家一書

一昔ま白紙と書

葉 小書心ニ括るの書あり

の文人の書画を収むる

大方便佛報恩經 七卷

竟文甲辰新秋

支那國溫故比丘助善輝

定珠散釋者於泰和山

寺尾木唐殿 六頁

為福院帶住

快書、其為存人、

古七版、

大乗本志地觀經 八卷

支那國翻社沙門道宗悅

山祐首所書于攝津南志

禳施之元回元收

紙施主 大井春三郎

妙法蓮華經 七卷

延寶二年歲在甲寅冬

為

支那國翻社溫故翻社

沙門道宗悅山林秀高

寺阿比道善住持

黃檗山長福院方丈

○坊主の筆名は三宅信之助とあるが
の字は三宅信之助とある

三宅信之助の筆名は三宅信之助とある

大抵の筆名は三宅信之助とある
三宅信之助の筆名は三宅信之助とある
三宅信之助の筆名は三宅信之助とある

三宅信之助の筆名は三宅信之助とある

三宅信之助の筆名は三宅信之助とある

三宅信之助の筆名は三宅信之助とある

三宅信之助の筆名は三宅信之助とある

三宅信之助の筆名は三宅信之助とある

三宅信之助の筆名は三宅信之助とある

一書畫山帖 二題 梅のこ

海老名信之助

山崎長岑の筆名は山崎長岑とある

出田守之助の筆名は出田守之助とある

の文人の書画を収めたものである



さうさ画と物細を拾め無
遊藝し得たり但し貧乏
千代も田とさふ

一村瀬茶城(山ゆえ) 行行

少作 終茶松彦あき本

仁高 車尾 活若 聯幅

秋書 下 尾 古 名 幅

卯を喰しも喰ら受け

施餉 拾らうへる

(二月十日)

○本丸の志書既読る大丸の意法と
限海とせんすことあしは笑の事おれ
外さうさの事井に投れもさうさ同さ
紙らあさうさ可思とらみえ書と
同さうさうさうさうさうさうさ
こさうさうさうさうさうさうさ
あさうさの情原もあさうさのこさ
すまはるさうさの情原もあさうさ
うさうさうさうさうさうさうさ
あさうさうさうさうさうさうさ
丸の事うさうさうさうさうさ
(キ)

A table on the left page of an open notebook. It features a blue rectangular border enclosing the page. Inside this border, there are 16 vertical blue lines that create 17 columns of equal width. The page is otherwise blank.A table on the right page of an open notebook, mirroring the left page. It has a blue rectangular border and 16 vertical blue lines creating 17 columns. The page is blank.

